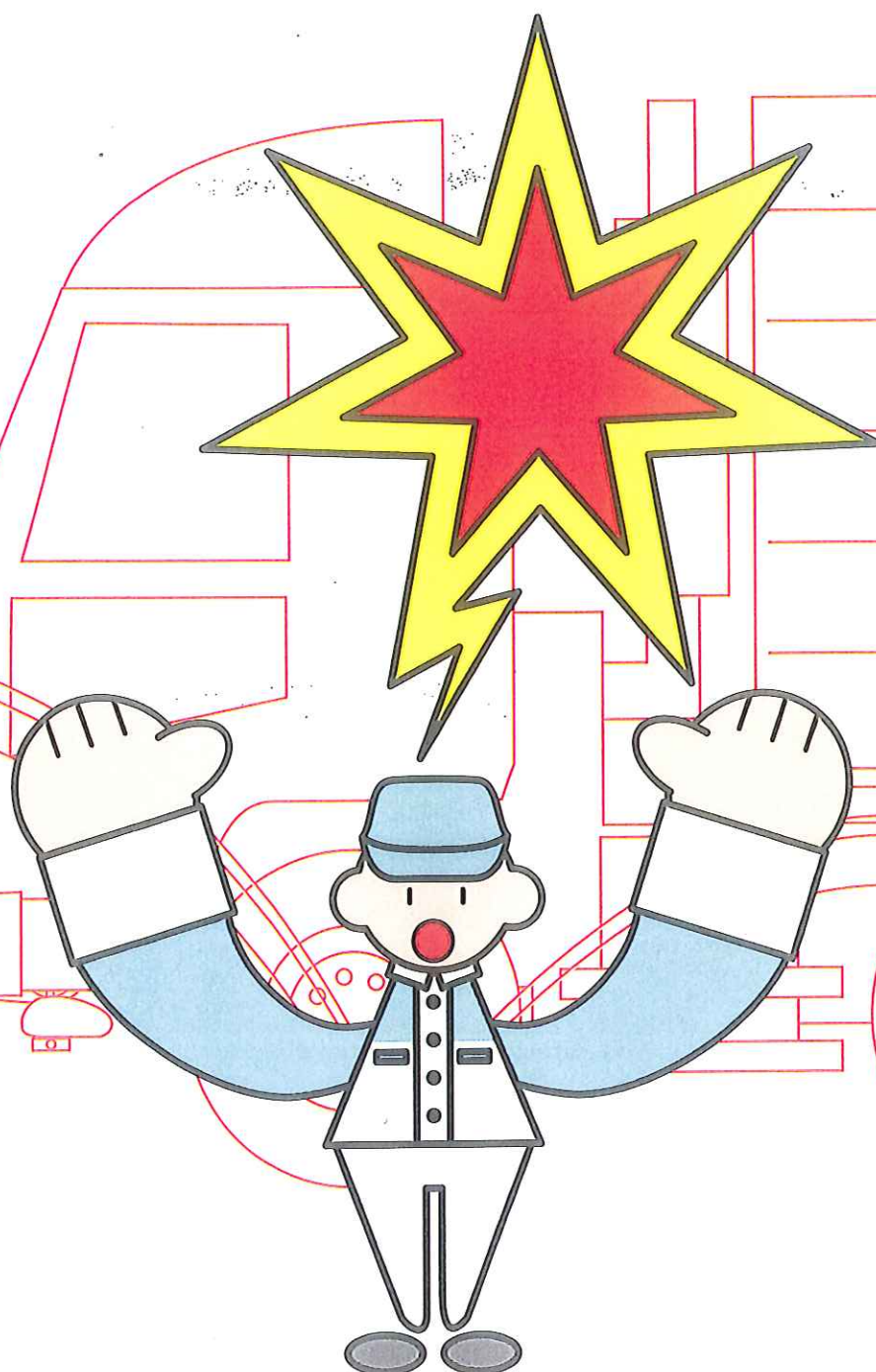


事業用トラックドライバー 研修テキスト

危険を予測した運転



はじめに

今日の物流の主役はトラックであり、貨物の安全・確実・迅速な輸送は、トラック運送事業者に課せられた社会的使命といえます。安全・確実・迅速な輸送を行うためには、交通事故を防止することが不可欠の条件となりますが、それには日常の運行管理等の強化を図ると同時に、ドライバーへの安全運転指導をより一層充実させることが重要なポイントとなります。

そこで、全日本トラック協会では、事業用トラックドライバーの安全知識や運転技能の向上を図ることを目的として、トラックの安全運転に必要な事項を体系的にまとめた「事業用トラックドライバー研修テキストシリーズ」を制作することにいたしました。本テキストは、その第4冊目で、交通場面に潜むさまざまな危険を予測するための方法を中心にまとめたものです。

事業所におけるドライバー教育に積極的に活用をしていただくとともに、ドライバーの皆さんは本テキストの内容をよく理解され、交通事故を起こさない安全な運転に努めていただくようお願いいたします。

社団法人 全日本トラック協会

CONT

I

第1章 危険予測運転の基本

1

1 危険予測運転とは	2
1 危険予測運転の必要性	2
2 危険予測運転の条件	3
2 危険予測の実際	6

II

第2章 相手の特性を知る

9

1 子供	10
1 子供の特性	10
2 事故防止のポイント	12
2 高齢者	13
1 高齢者の特性	13
2 事故防止のポイント	16
3 自転車	18
1 自転車の特性	18
2 事故防止のポイント	20
4 二輪車	22
1 二輪車の特性	22
2 事故防止のポイント	24

III

第3章 気象状況に潜む危険を読む

25

1 雨天時	26
1 雨天時の危険性	26
2 事故防止のポイント	27
2 降雪時・積雪時	28
1 降雪時・積雪時の危険性	28
2 事故防止のポイント	29

ENTS

3 濃霧時	31
1 濃霧時の危険性	31
2 事故防止のポイント	32
4 強風時	33
1 強風時の危険性	33
2 事故防止のポイント	34



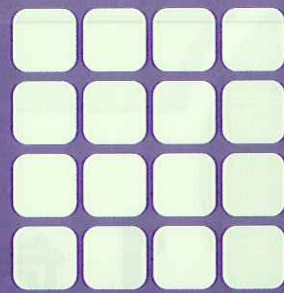
第4章 危険予測運転

35

1 交差点左折	36
2 単路走行	38
3 構内から車道への右折	40
4 踏切走行	42
5 雨天時の高速道路走行	44
6 カーブ走行	46



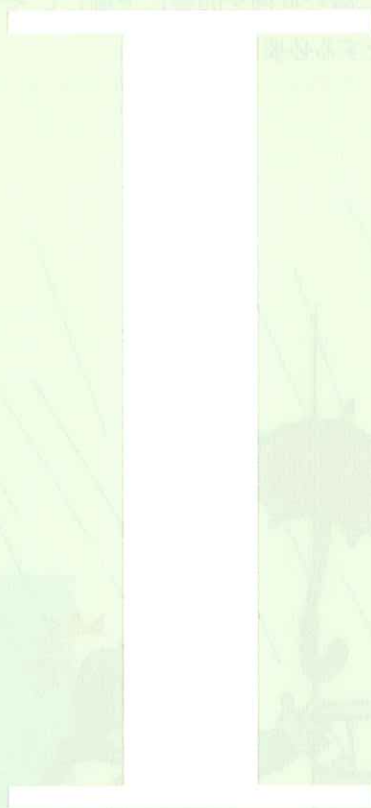




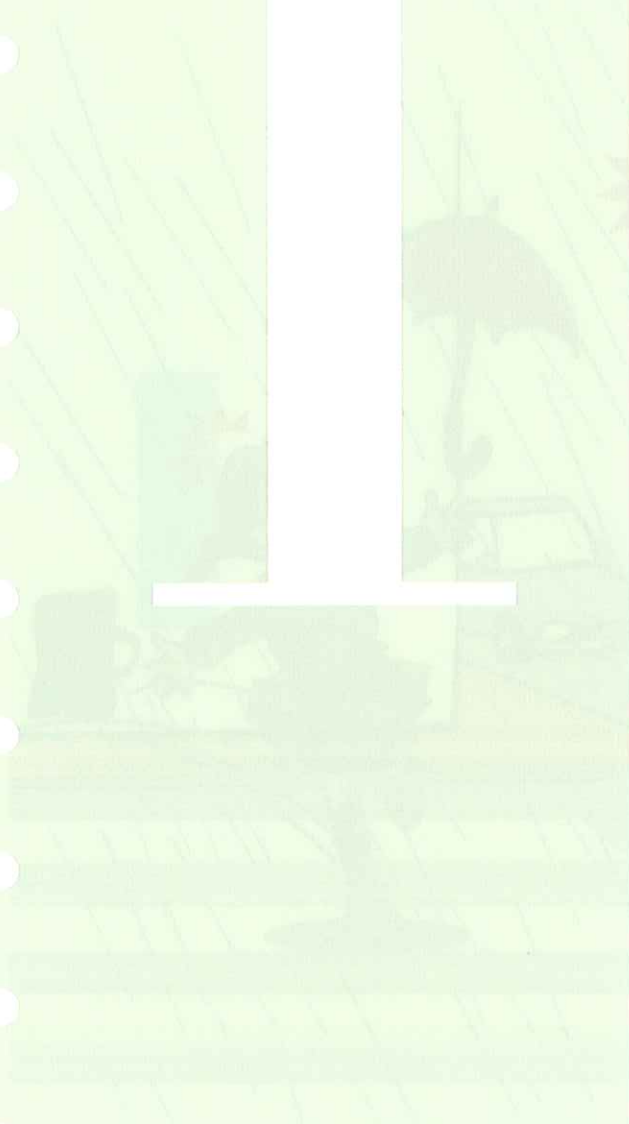
危険予測運転 の基本

おとす時重隊そ

多、はつたさるやまけんが全うはつたさるが中
を渡すため、ア、はつたさるが中を渡すため、
おとす時重隊そ



おとす時重隊そ



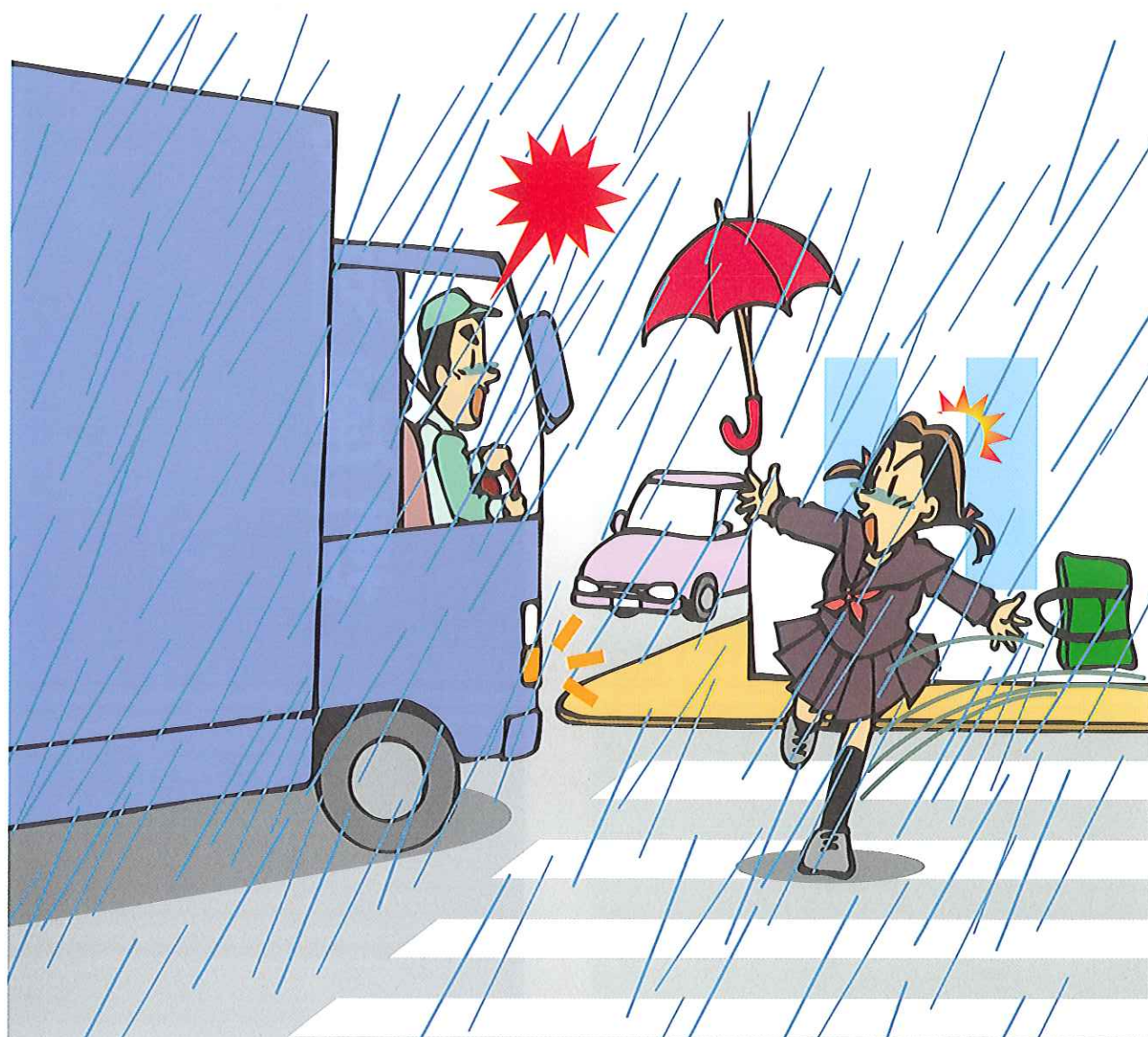
I 危険予測運転 の基本

1. 危険予測運転とは

1 危険予測運転の必要性

交差点右折時の対向車や歩行者、単路での前車の急停止、住宅街などでの子供の飛び出しや高齢者の急な道路横断など、交通場面にはさまざまな危険が潜んでいます。

事故を起こさない安全な運行をするためには、交通場面に潜む危険を的確に予測して、それを回避する運転をする必要があります。



2 危険予測運転の条件

■周囲をよく見る

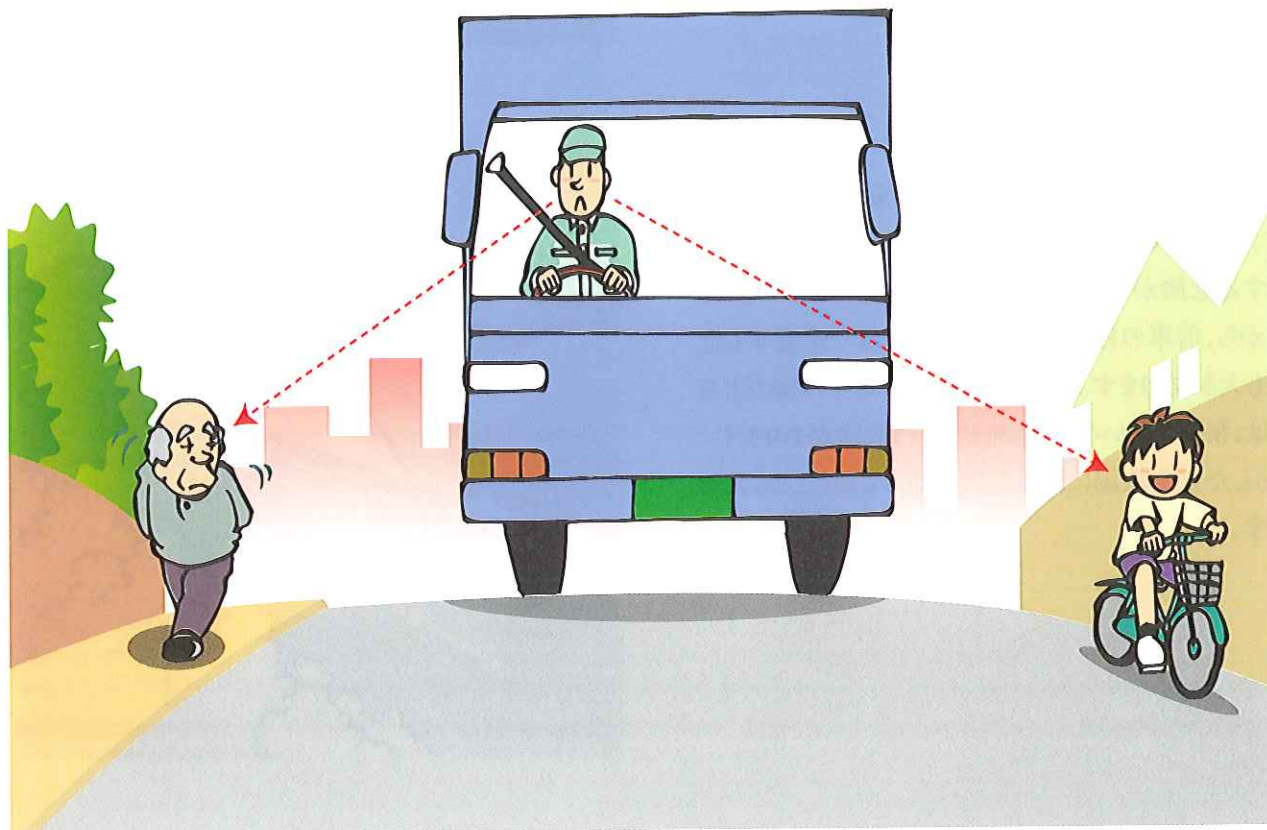
危険を予測するためには、まず、周囲の状況を正しく把握しておく必要があります。運転に必要な情報の大半は目から得られるといわれています。つまり、ドライバーは「見る」ことによってさまざまな情報をつかんでいるわけです。

しかし、「見る」といっても漫然と見ているのでは不十分です。「心ここにあらざれば視れども見えず」という言葉があるように、ぼんやりと見ていたのでは、見落としや見誤りが起こります。見ようという気になって見るのが大切です。

■見えない危険を読む

危険は常に目に見えているとは限りません。例えば、見通しの悪い交差点では、交差道路側の状況は見えません。しかし、見えないからといって、危険が存在していないわけではありません。交差する道路を車や自転車が進行している可能性は十分あります。

交通場面には、こうした見えない危険はたくさんあります。見えないけれども危険が存在しているかもしれないと考えて走行する必要があります。



I

危険予測運転 の基本

■相手の特性を知る

道路の前方に高齢歩行者が立っている場面を考えてみましょう。

この場合、「車が接近していても横断してくる」という高齢者の歩行特性を知っていれば、横断を予測してスピードを落とし高齢者の動きに注意するでしょう。しかし、知らなければ「まさか横断してくることはないだろう」と考えて、そのままのスピードで走行するでしょう。どちらが事故を起こしやすいかは明らかです。

危険を的確に予測するためには、子供や高齢者、自転車、二輪車などの特性を知っておくことが重要なポイントになります。



■気象状況に潜む危険を知る

同じ道路でも、気象状況によって危険は違ってきます。雨や雪の場合には、路面が滑りやすくなりスリップする危険が大きくなります。また、視界も悪くなりますから、前車の停止に気づくのが遅れて追突する危険も大きくなります。さらに、冬期の山間部の橋の上などは、積雪していなくても凍結という危険があります。こうした気象状況に潜む危険を知っておくことも大切です。

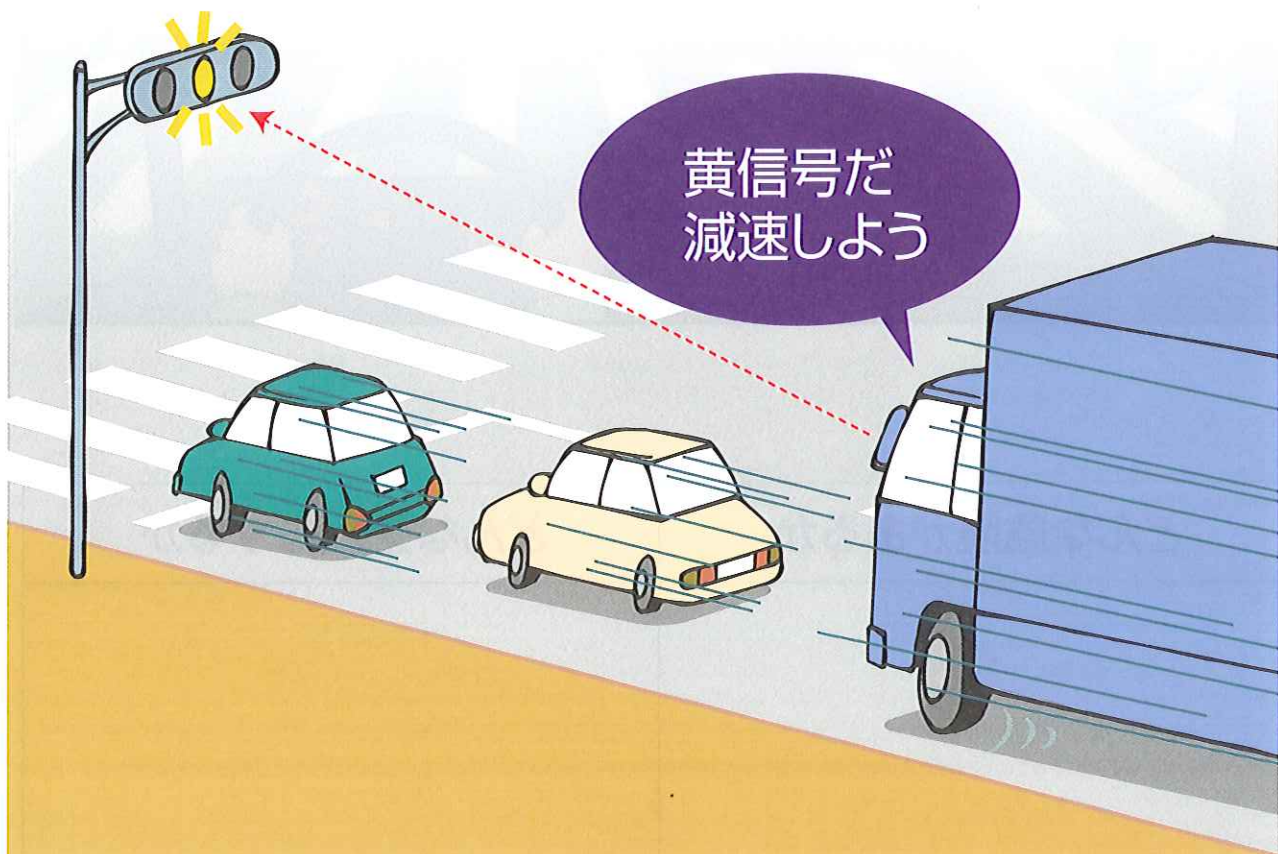


■先の状況に目を配る

走行中に前車の動きに注意するのは当然ですが、それだけでなく、その先の状況にも目を配ることが重要です。

例えば、前車の前方に横断歩道があり、歩行者が横断しようとしている状況がつかめれば、前車が横断

歩道の手前で停止するかもしれないと予測できます。このように、先の状況を把握することによって、前車の減速や停止、進路変更等の運転行動をあらかじめ予測することができ、スピードを落としたり車間距離をとることによって、追突事故を未然に防止することができるのです。

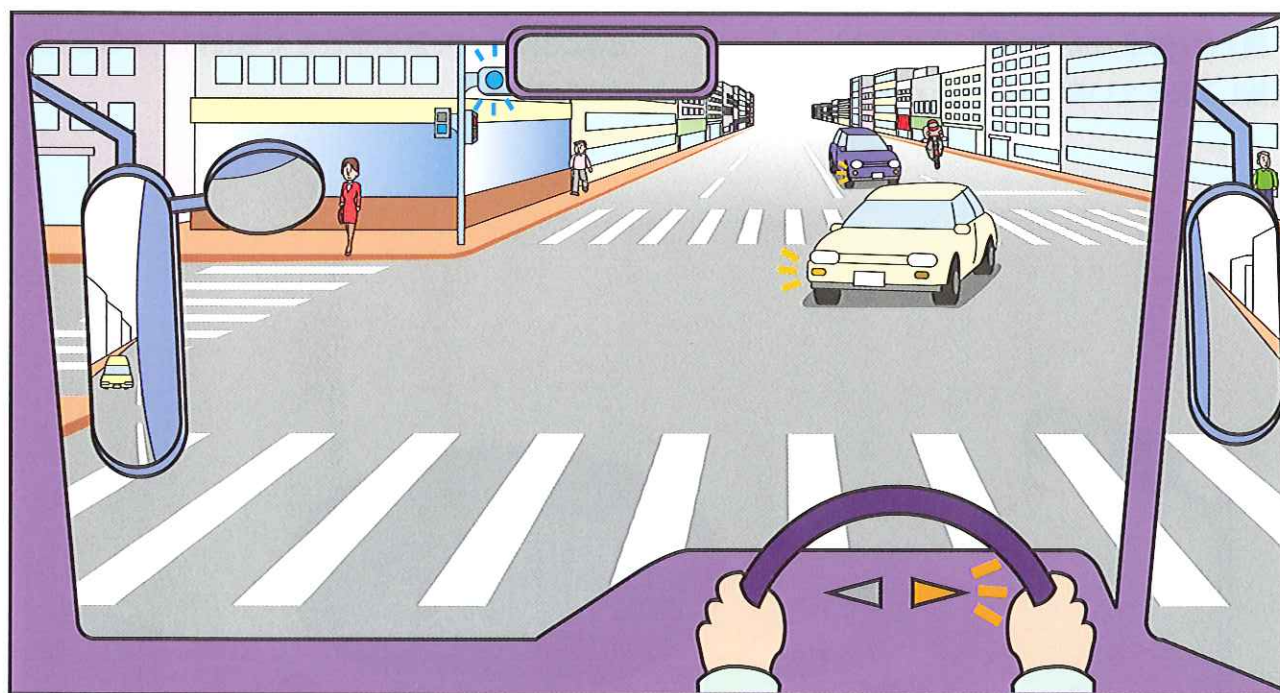


I 危険予測運転 の基本

2.危険予測の実際

下のイラストを見てください。これはトラックの運転席から見た交通場面を描いたものです。このトラックは前方の交差点を右折しようとしています。

この場面には、どんな危険があるでしょうか。また、危険を避けて安全な運転をするにはどうすればよいでしょうか。



どんな危険があるか	どんな運転をするか

解説

■どんな危険があるか

この場面には、どのような危険があるでしょうか。主な危険としては、次のようなものがあります。

①対向右折車の側方から進行してくる二輪車と衝突する。

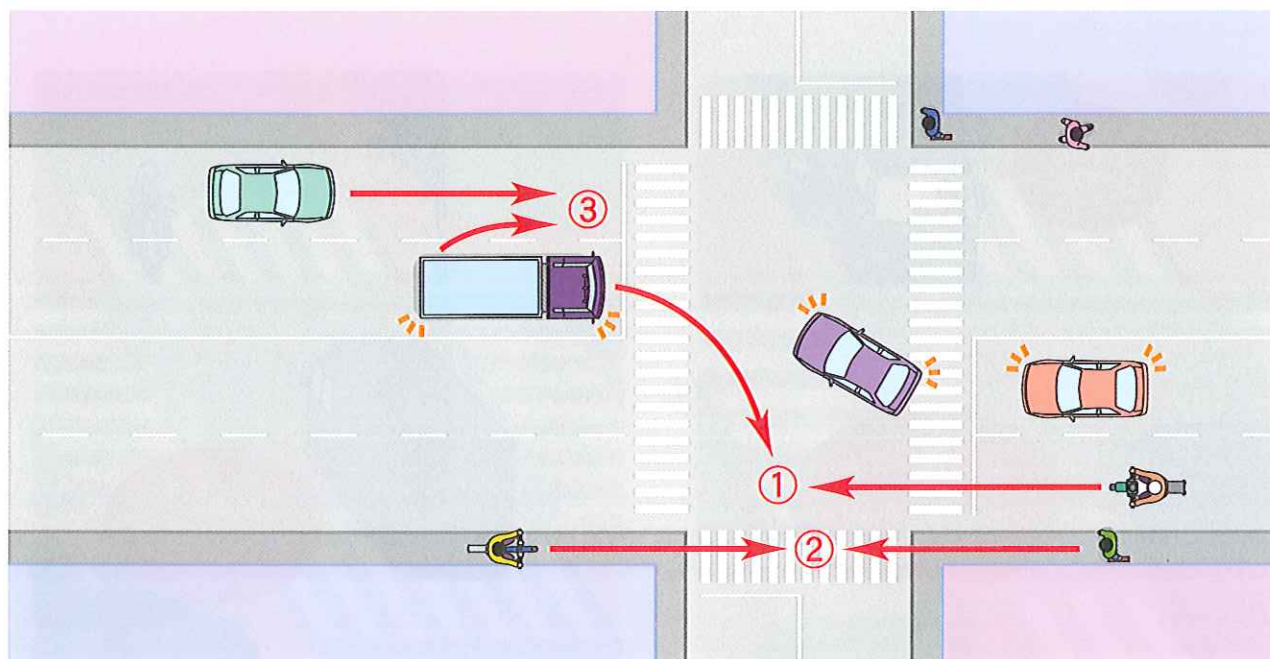
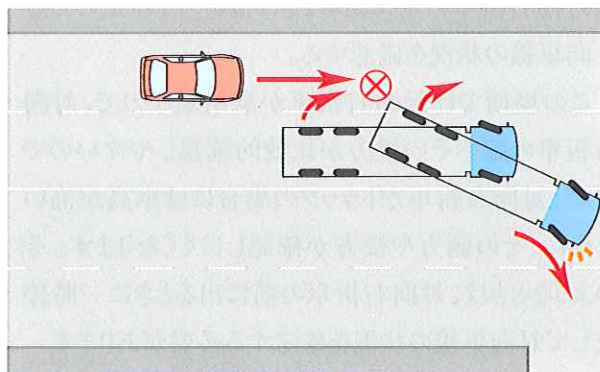
二輪車は車体が小さいために、トラックドライバーは二輪車の速度を遅く感じたり、距離を実際よりも遠くに判断しがちです。そのため二輪車よりも先に行けるだろうと考えて右折をし衝突するというケースがよくあります。

②横断中の歩行者や自転車と衝突する。

対向車にばかり注意を向けていると、横断しようとしている歩行者や自転車を見落とししたり、発見が遅れてしまうことがあります。

③車両の後部が後続車と接触する。

車体の長いトラックはオーバーハングも大きいため、右折するとき車両の後部が右にふれて、後続車と接触する可能性があります。



I 危険予測運転 の基本

2 | 危険予測の実際

I

■危険を避ける安全運転のポイント

では、危険を回避するためには、どのような運転をすればよいでしょうか。主なポイントをあげてみましょう。

①対向車がいるときは、通過を待つ。

特に対向車が二輪車の場合は、その速度や距離の判断を誤りやすいので注意します。

②対向右折車の前に出るときには、一時停止して対向車線の状況を確認する。

この場面では対向右折車が乗用車なので、対向右折車の脇やその後方が比較的確認しやすいのですが、対向右折車がトラックの場合には車高が高いために、その側方や後方が確認しにくくなります。そのようなときは、対向右折車の前に出るときに一時停止して対向車線の状況を確認する必要があります。

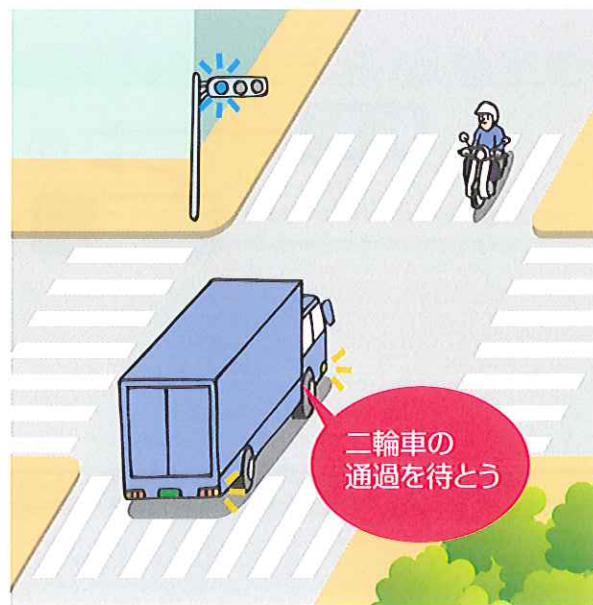
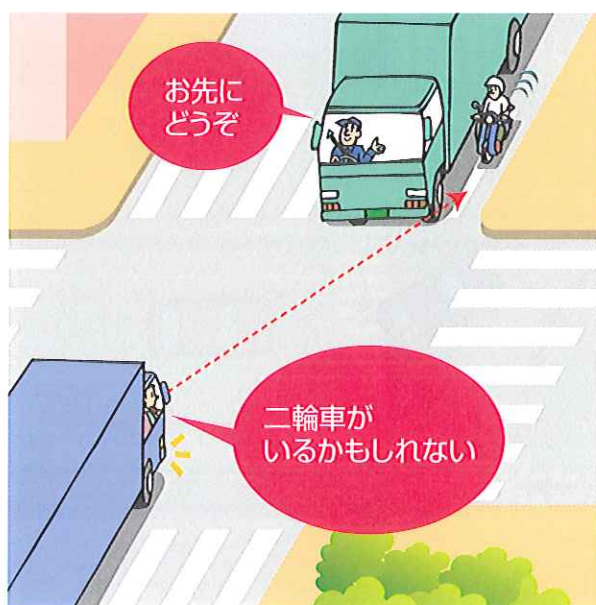
③対向車線の状況が確認できて右折していくときは、横断歩道やその付近の状況を確認する。

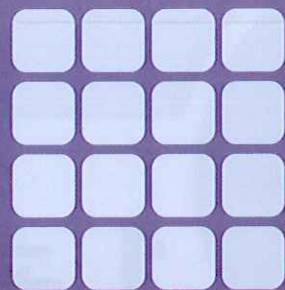
交差点を通行するのは車だけではありません。それを忘れてしまうと歩行者や自転車に対する注意力が薄れて事故になることがありますから注意してください。

④右折するときには、徐行で進行する。

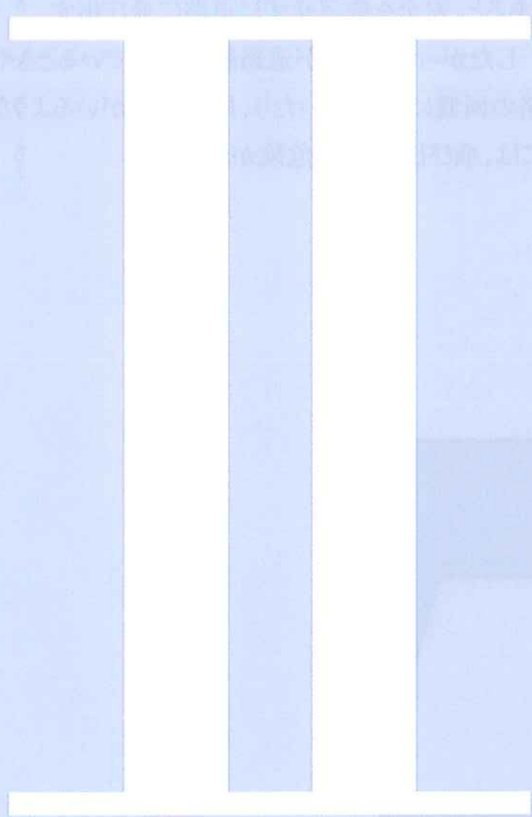
徐行とは、いつでも停止出来る速度のことで、おおむね時速10キロ以下の速度で進行することをいいます。右折時は徐行で進行し、歩行者や自転車がいるときは必ず横断歩道の手前で停止します。

*危険予測の具体的な場面については、本書35頁の「IV 危険予測運転」に掲載しておりますので参照してください。





相手の特性を知る



II 相手の特性を知る

1. 子供

1 子供の特性

■飛び出しが多い

子供の事故の特徴は飛び出し事故が多いということです。これは、次のような子供の特性と関係があります。

- ・「車はすぐに止まらない」ことがわからない。
- ・遊びに夢中になると車に対する注意が欠ける。

・道路の片側に親や友達がいったり、興味を引くものがあると、安全を確認せずに道路に飛び出す。

したがって、子供が道路脇で遊んでいるときや、道路の両側に子供がいったり、片側に親がいるようなときには、飛び出してくる危険があります。



■他の子供の真似をする

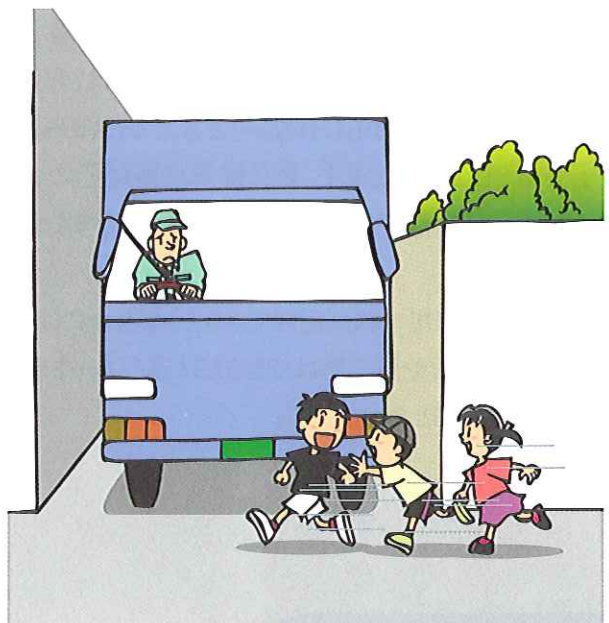
子供は、他の子供と同じような行動をする習性があります。そのため、一人が道路に飛び出すと他の子供も真似をして飛び出すことがよくあります。

■物かげで遊ぶ傾向がある

子供は物かげを好む傾向があるといわれます。そのため駐車車両の脇で遊ぶこともよくあります。しかも、子供は背が低いため、車のかげに隠れてしまい接近してくる車の発見が遅れます。一方、ドライバーも子供の発見が遅れますから、飛び出し事故につながりやすいのです。

■大人と一緒にいるときのほうが行動が悪化する

子供は大人と一緒にいるときのほうが、安心感から行動が悪化するといわれます。大人が立ち話をしているすぐそばで、子供がふざけて遊んでいるのはよく目にする光景です。大人がすぐそばにいるからといって、飛び出してこないとは限りません。



II 相手の特性を知る

2 事故防止のポイント

■子供の多い場所では「飛び出し」に注意

学校や公園付近など、子供の多い場所では、「子供が飛び出してくるかもしれない」と考えて、スピードを十分落として走行します。特に駐車車両付近に子供がいるときは、飛び出しの危険性が大きくなりますから要注意です。

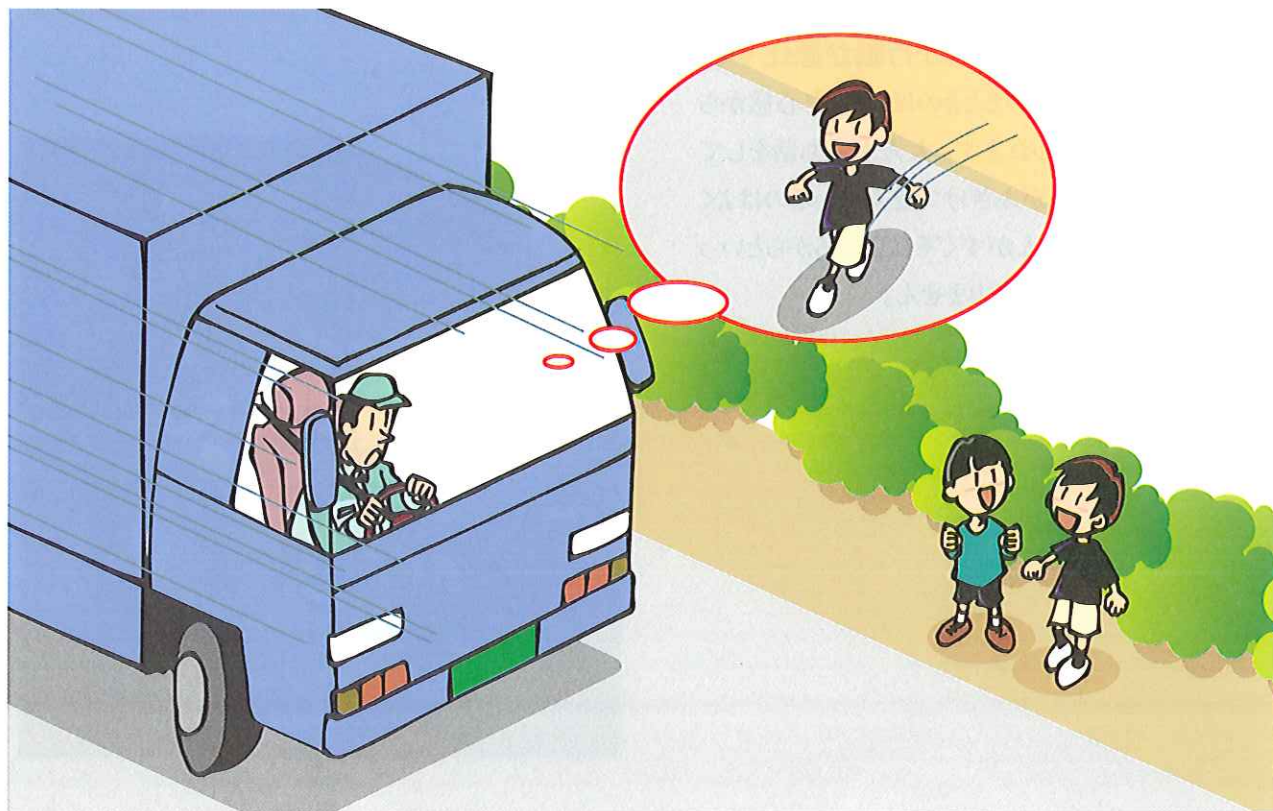
他の道路を利用すれば迂回できるような場合には、子供の多い場所や通学路はできるだけ運行ルートから外すようにするとよいでしょう。

■複数の子供がいるときに危険

子供は、一人にいるときよりも数人のグループでいるときのほうが行動が悪化しますから、下校途中などで数人の子供が道路脇にいるときは、子供の動きから目を離さず慎重に走行しましょう。

■乗車前に車の周囲に子供がいないか確認する

駐車中の車の下に子供が隠れていたり、車の周囲で子供が遊んでいることがありますから、住宅街などでは乗車する前に、車の周囲や車の下に子供がいないかどうかを必ず確認します。



2. 高齢者

1 高齢者の特性

■ 交通事故の死者は高齢者が多い

高齢化社会が進行しているなかで、65歳以上の高齢者が事故の犠牲者となる割合が年々高くなっており、全体の半数近くに達しています。



■ 65歳以上の高齢者の交通事故死者数の割合

	65歳以上の高齢者	高齢者以外
平成16年	41.4	58.6
平成17年	42.6	57.4
平成18年	44.2	55.8
平成19年	47.5	52.5
平成20年	48.5	51.5

II 相手の特性を知る

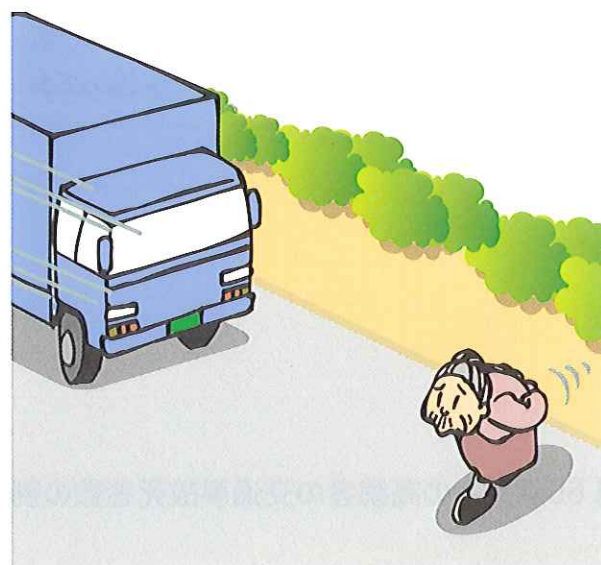
■走行車両の直前直後の横断が多い

歩行中の高齢者の死亡事故について、高齢者の違反内容をみると横断違反が多くなっていますが、そのなかでも特に走行車両の直前後の横断によるものが最も多くなっています。

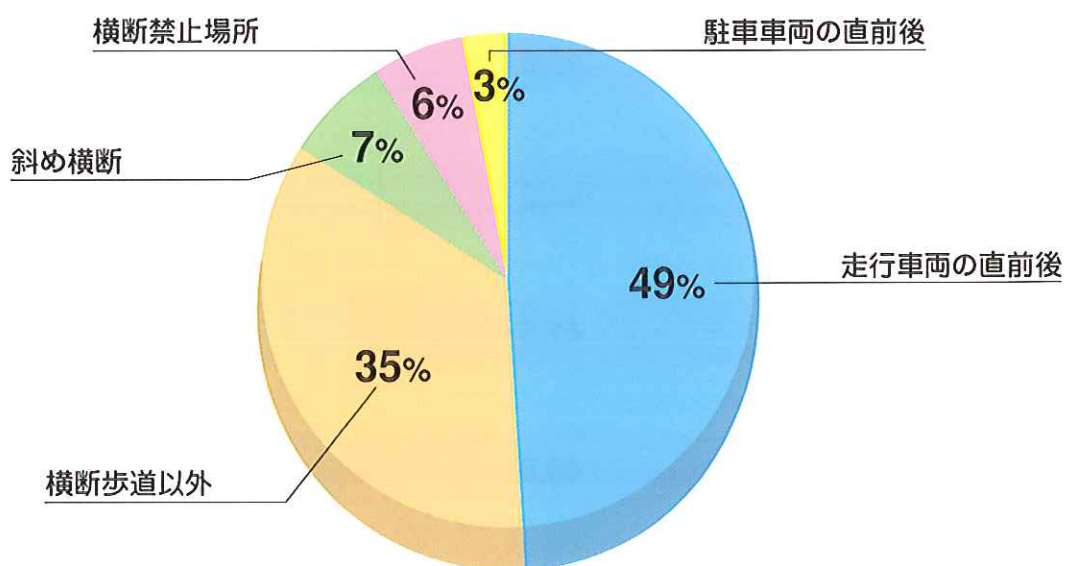
この原因として、

- ・視力や聴力の衰えのために車に気づかない。
 - ・判断力が低下しているため、車のスピードがつかめない。
 - ・車のほうが避けてくれるだろうという気持ちがある。
- などがあげられます。

そのため車が接近しても横断してくることがありますから、「高齢者は自車の接近に気づいているはずだから、横断してこないだろう」と考えるのは非常に危険です。



■65歳以上の歩行中死者数における横断違反の内訳（第1、2当事者）（平成20年）

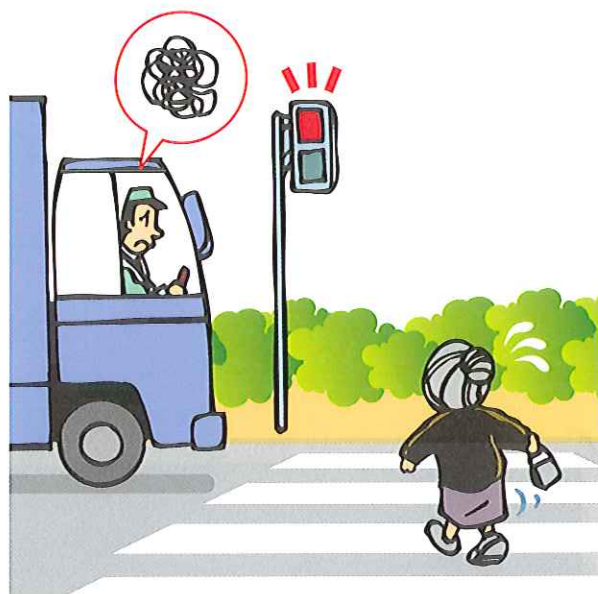


※小数点以下第1位を四捨五入しています。

■歩行速度が遅い

高齢者は歩く速度が遅いために横断に時間がかかります。そのため、横断開始のときは青信号でも、途中で信号が赤に変わるというケースもあります。

また、高齢者は体力の衰えから、車が接近したり信号が変わったからといって、急に走ったり早足で渡ることもできず、車を避けるためのとっさ動作もとれませんから、その点に注意する必要があります。



■深夜や明け方に出歩く

高齢者は深夜や明け方に出歩くことがよくあります。こうした時間帯は車の通行量も少ないために、安全を確認せずに道路を横断しやすいのです。また、高齢者は黒っぽい服装をしていることが多いので、夜間は発見が遅れやすいという点にも注意する必要があります。



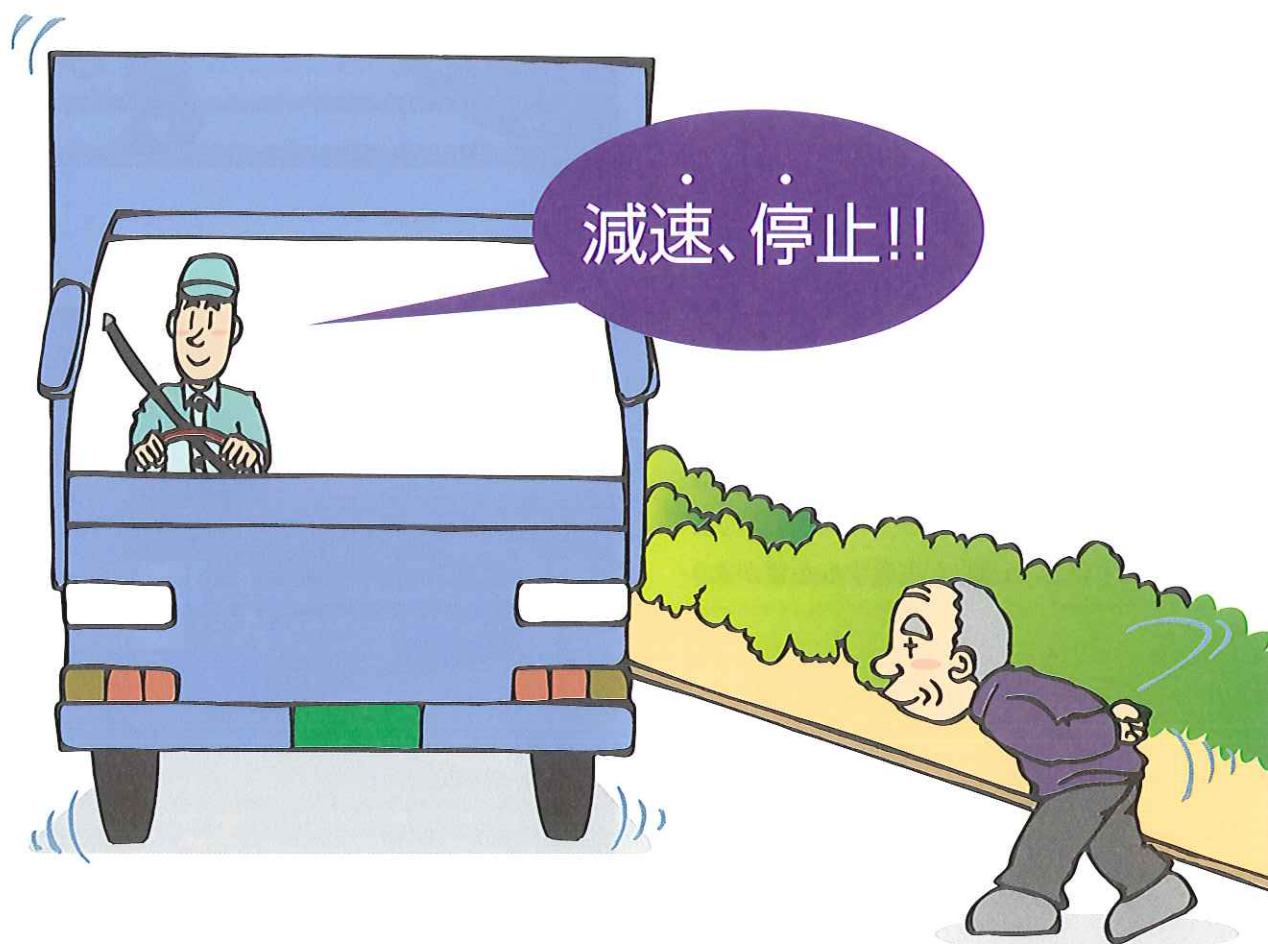
II 相手の特性を知る

2 事故防止のポイント

■高齢者をみたらスピードを落とす

道路の端に立っている高齢者を見かけたときは、「横断してくるかもしれない」と考えて、その動きによく注意しながらスピードを落とすようにします。

また、高齢者はフラフラと車道に出てくることがありますから、その側方を通過するときは、側方間隔も十分にとる必要があります。



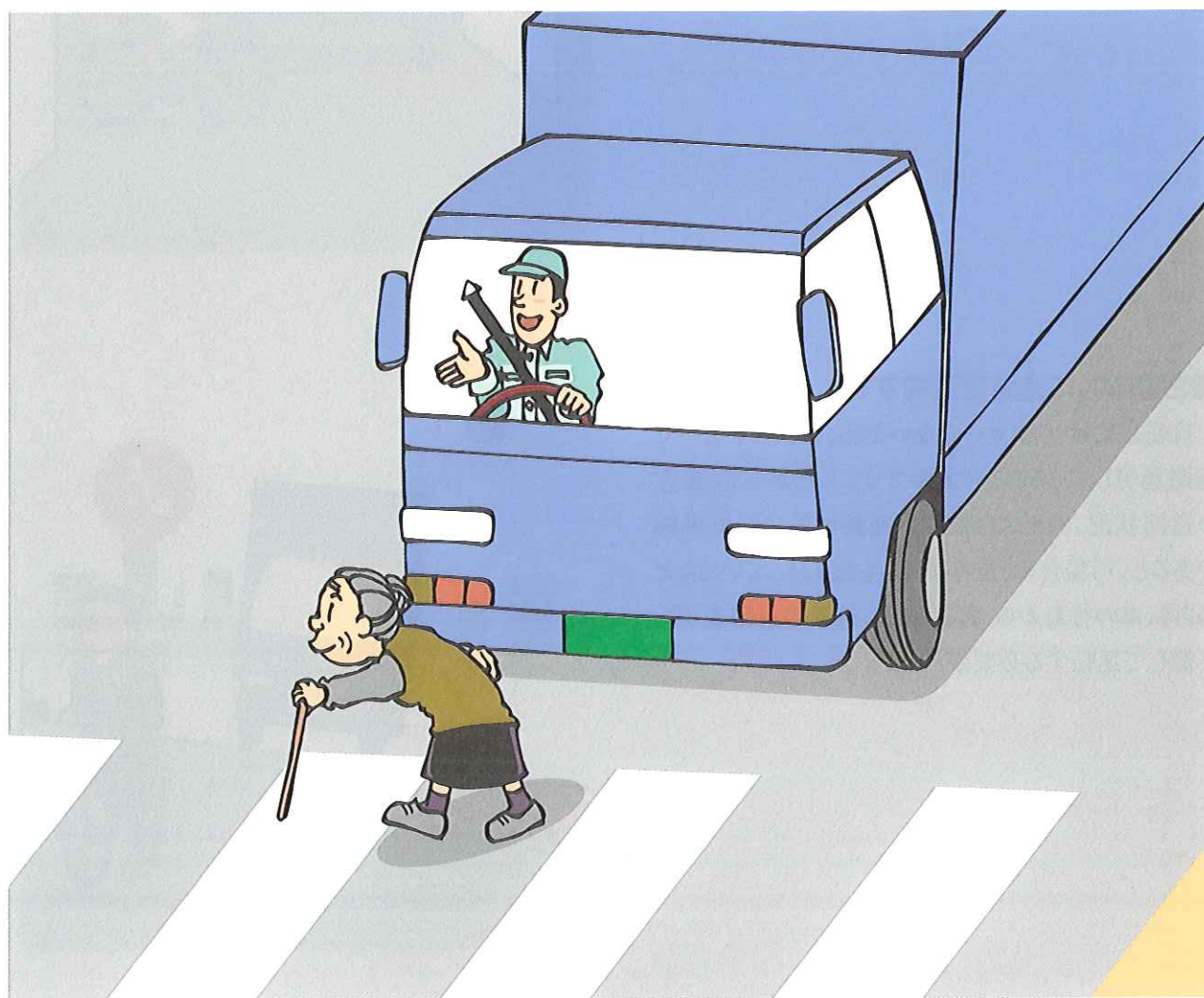
■高齢者を先に行かせる

高齢者が横断してきたときは、減速や一時停止をして先に行かせます。

また、減速や停止をする場合は後続車の追突に注意し、徐々にスピードを落とすようにします。

■夜間や明け方に歩行者を見たら 高齢者考える

夜間や明け方に道路の前方に歩行者を見かけたときは、高齢者かもしれないと考えてスピードを落としましょう。



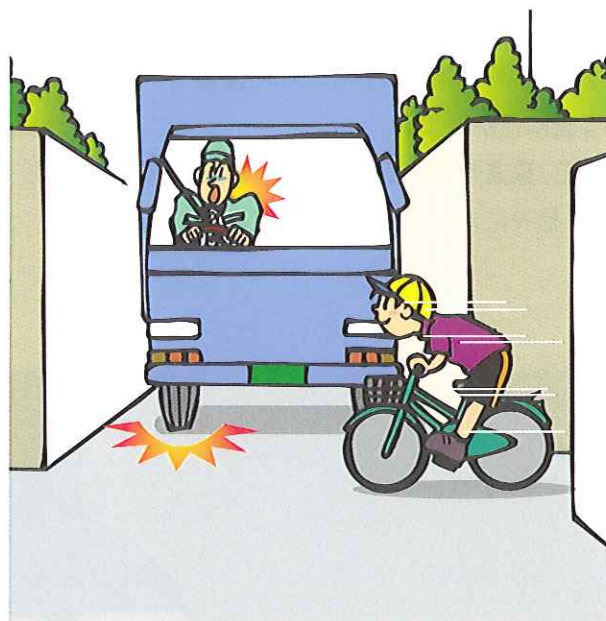
II 相手の特性を知る

3. 自転車

1 自転車の特性

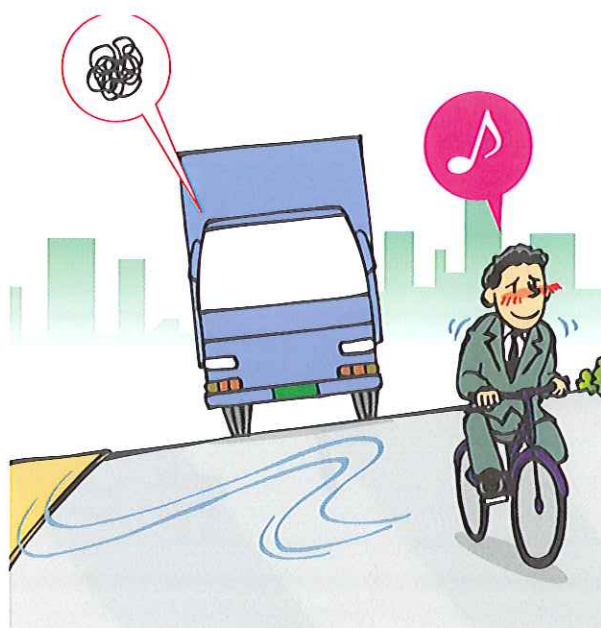
■安全確認をしない

見通しの悪い場所でも安全を確認せずに飛び出してきたり、後方の状況を確認せずに進路変更することがよくあります。特に、子供や高齢者の乗った自転車はそうした行動をしがちです。



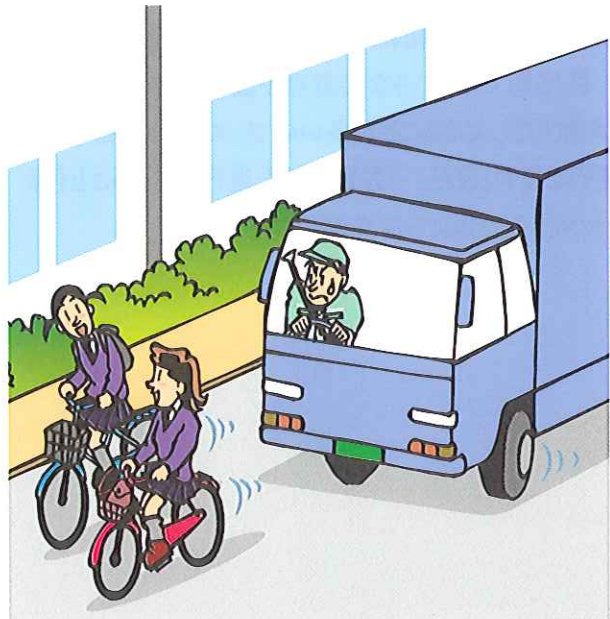
■合図なしに進路変更をする

自転車にはウinkerがないため、合図をしないで進路変更してくることが大半です。したがって、前方の道路状況、例えば自転車の進路の先に駐車車両があるという場合や、後ろを何度も振り返っているなどの自転車の行為から、ある程度自転車の進路変更を予測して運転する必要があります。



■交通ルールを理解していない

自転車に乗る人のなかには、子供や高齢者のように運転免許を持たず、交通ルールをよく理解していない人も少なくありません。そのため交通ルールを無視した行動をとることもあります。



■2人乗りの自転車や

傘をさした自転車などは不安定である

2人乗りの自転車あるいは高齢者の乗っている自転車、雨の日に傘をさして片手で運転している自転車などは、たいへん不安定で、ちょっとした路面の変化でもバランスを崩してしまうことがあります。

また、数台の自転車が団子になって走行していることもよくありますが、こうした場合に、自転車同士が接触して転倒するというケースもあります。

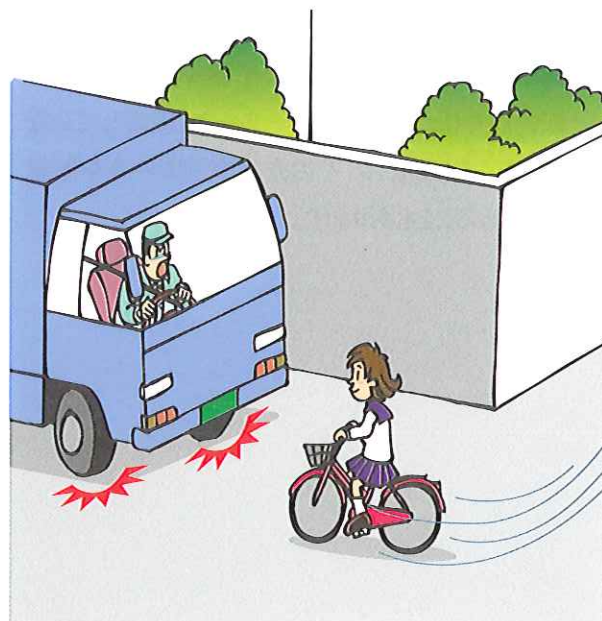


II 相手の特性を知る

2 事故防止のポイント

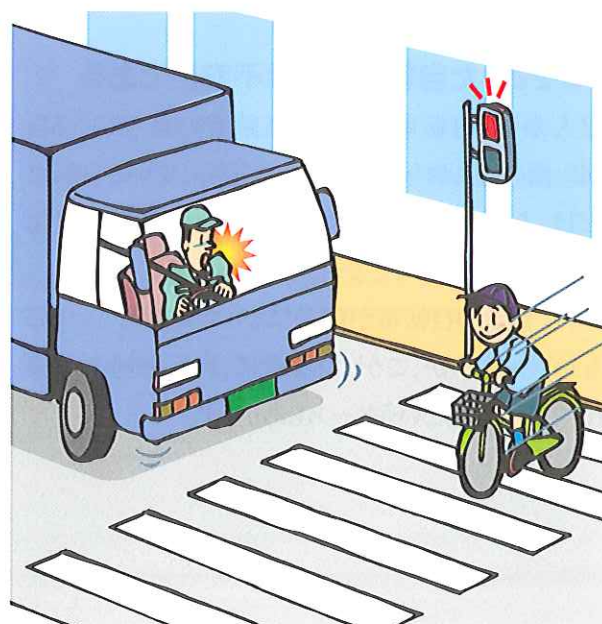
■住宅街では特に自転車に注意する

住宅街では、小さな交差点や脇道などから自転車が飛びだしてくることが多いので、スピードを落として走行します。また、一方通行路を逆行してくることも多いので、その点にも注意が必要です。



■交差点では信号の変わり目に注意

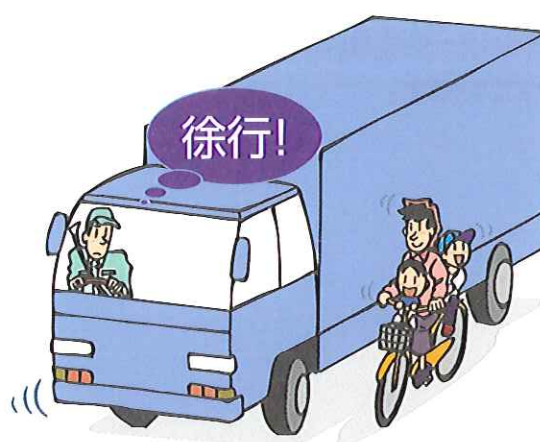
信号の変わり目に、自転車がスピードをあげて交差点を横断してくることがありますから、信号が変わって発進していくときや右左折するときは、自転車の動きにもよく目を配るようにします。



■自転車を追い抜くときは 十分な側方間隔をとる

子供や高齢者の乗った自転車、二人乗りの自転車、傘をさした自転車などを追い抜くときや追い越すときは、十分な側方間隔をとります。

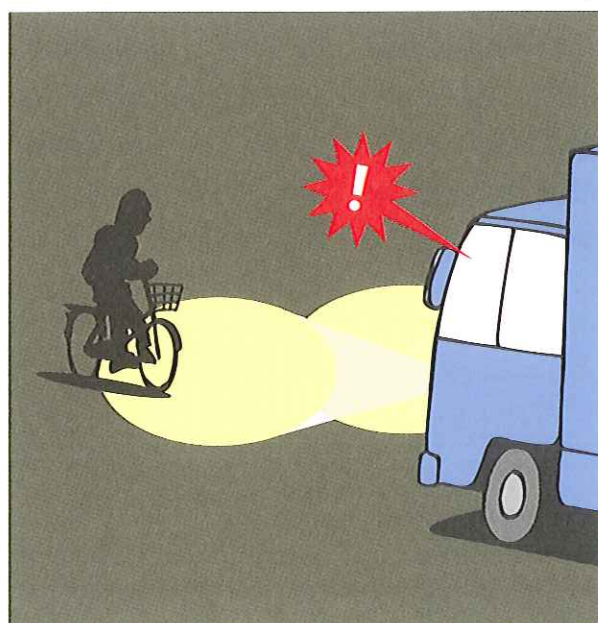
また、自転車の動きや前方の状況に目を配り、自転車の進路変更が予測されるときは、追い抜きや追越しはやめるようにします。特に、自転車に乗っている人が後ろを振り向いたときは、進路変更が予測されるので十分注意しましょう。



■夜間は無灯火で走る自転車に注意する

夜間は無灯火の自転車に注意が必要です。特に暗い道路では、無灯火の自転車はほとんど見えず、ヘッドライトに照らされてはじめて自転車に気づくというケースがよくあります。夜間に暗い道路を走行するときは、ヘッドライトの下向きの照射範囲内（約40メートル）で十分に停止できる速度で走行することが大切です。

乾いた道路での時速60キロの場合の停止距離は約44メートル、時速50キロでは約32メートルですから、少なくとも時速50km以下の速度で走行するようにします。



相手の特性を知る

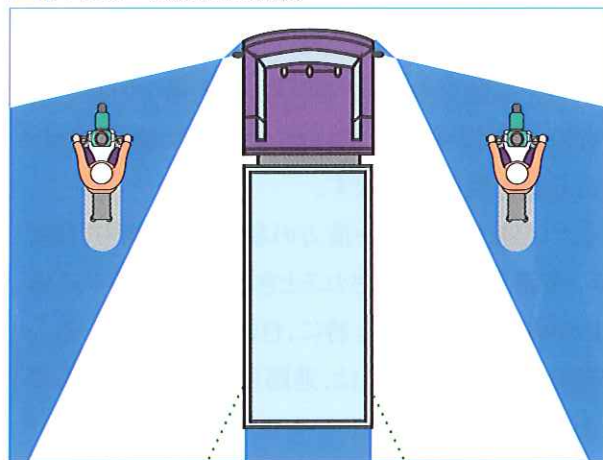
4. 二輪車

1 二輪車の特性

■死角に入りやすい

二輪車は四輪車に比べて小さいために、対向車の死角やミラーの死角に入り、発見が遅れたり、見落としやすくなります。

■サイドミラーの死角となる範囲



■バランスを崩し転倒しやすい

二輪車は路面のちょっとした変化や、落葉、砂などでバランスを崩したり、大型車が側方を通過するときの風圧でバランスを崩すことがあります。また、急停止したときには転倒することが多く、路面に投げ出されたライダーをはねてしまうという事故もよく起こります。

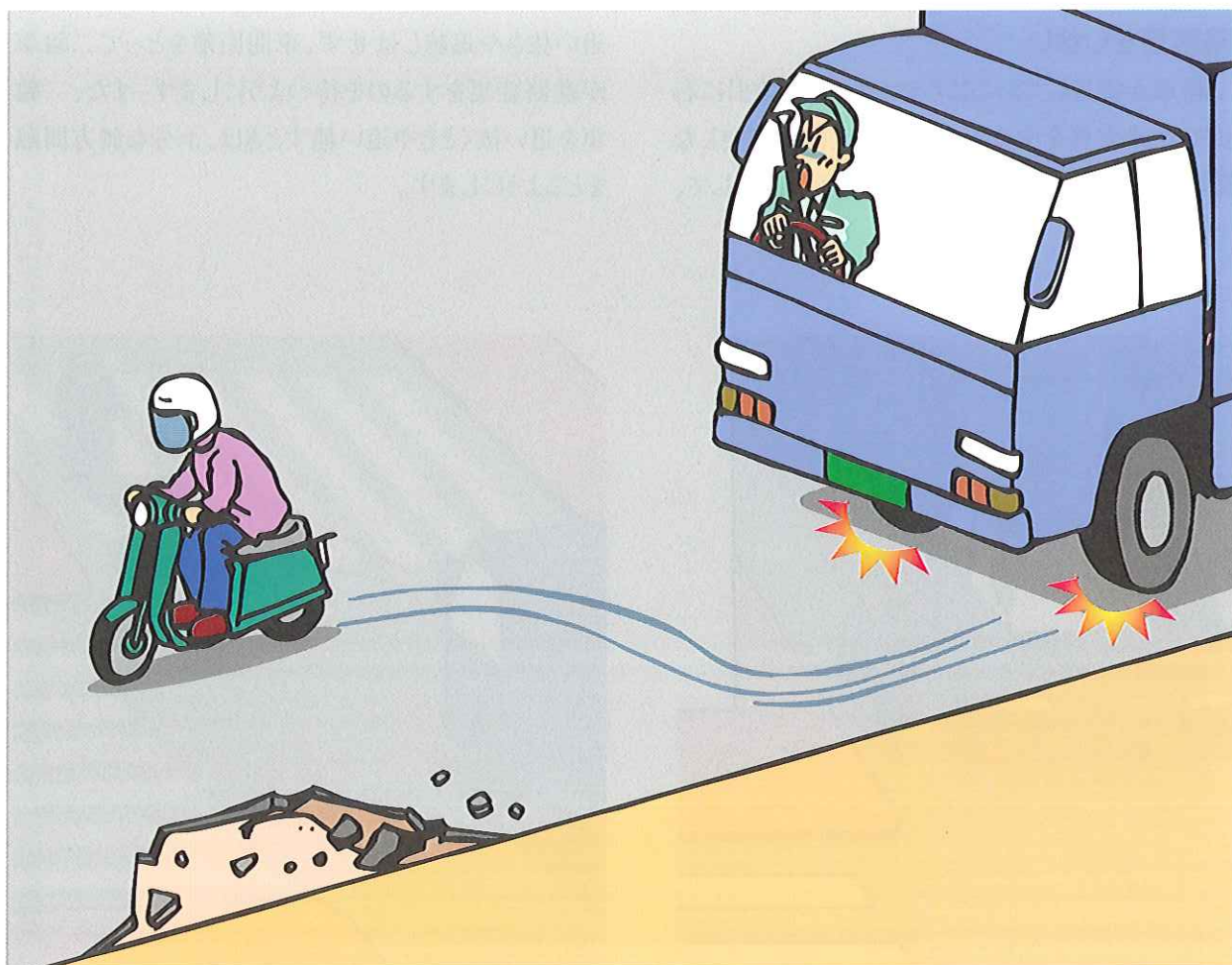


■急に進路変更することがある

二輪車、なかでも原付バイクの場合は道路の左端を走行することが多いのですが、道路の左端は駐車車両その他の障害物が多く、路面の変化も激しいので、急に進路変更することがよくあります。

■狭い隙間を走行できる

大型二輪車以外の二輪車は、1メートル程度の隙間があれば走行できるといわれています。そのため車と車の間の隙間を走行したり、路側を走行することもあります。



II

相手の特性を知る

4

二輪車

II

2 事故防止のポイント

■右左折時には二輪車の有無を確認する

渋滞で停止している車の間を右折していくときや、対向車に道を譲られて右折していくときには、対向車のかげから二輪車が接近していないかどうかを必ず確認します。また、左折時には左後方や側方に二輪車がないかどうかを確認します。

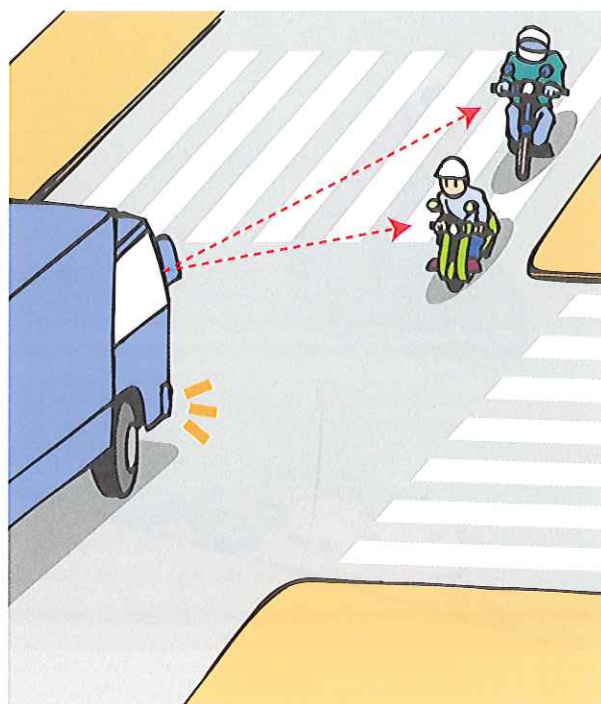
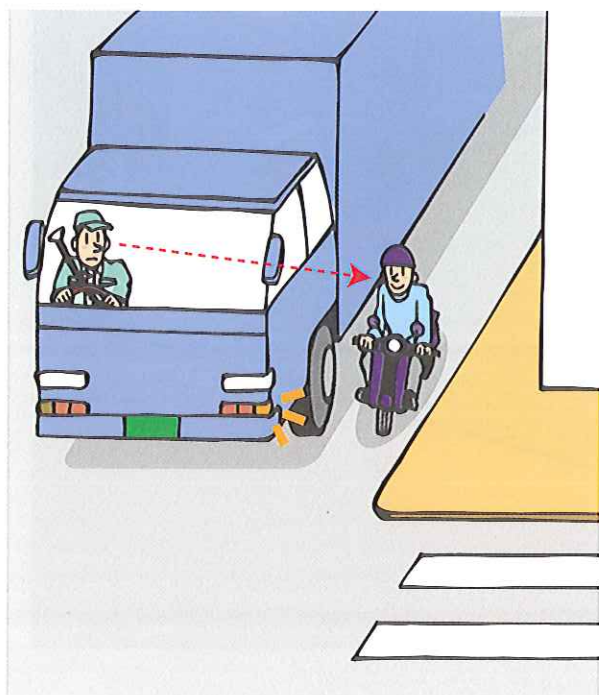
■二輪車が接近しているときは右左折や進路変更をしない

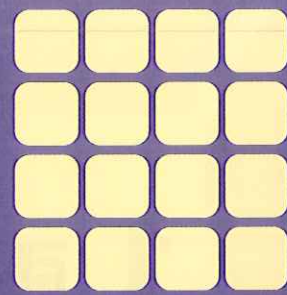
二輪車が接近しているにもかかわらず、強引に右左折や進路変更をすると、たとえ直接には衝突しない場合でも、急ブレーキをかけた二輪車が転倒して、

ライダーが路面に叩きつけられたり、車にはねられたりする重大事故につながります。二輪車が接近しているときは、右左折や進路変更をせず、二輪車を先に行かせるようにします。

■二輪車の進路変更を予測する

前方に駐車車両がある場合は、左端を走行する二輪車は進路変更してくることが予測されますから、追い抜きや追越しはせず、車間距離をとって二輪車が進路変更をするのを待つようにします。また、二輪車を追い抜くときや追い越すときは、十分な側方間隔をとるようにします。





気象状況に潜む危険 を読む

III 気象状況に潜む 危険を読む

1.雨天時

1 雨天時の危険性

■視界が悪くなる

雨天時は視界が悪くなり危険の発見が遅れます。特に、サイドミラーが水滴のために見えにくくなります。また、前車の水しぶきや追い越していく車両の水しぶきなどで、一瞬視界が遮られることもあります。

■路面が滑りやすい

雨天時は路面が濡れているため、停止距離が長くなるとともに、スリップの危険性も大きくなります。特に、雨の降り始めからしばらくの間が、最もスリップしやすくなります。これは、雨が降ると舗装道路の表面の土ほこりがオイル状になり、ちょうど路面に油をひいたような状態になるからです。



2 事故防止のポイント

■雨が降り始めたら、スピードを落とす

雨が降り始めたらスピードを落とし、前車との車間距離を長くとるようにします。高速道路で、速度規制が出されたときには、必ずその速度を守ります。

また、急なハンドル操作やブレーキ操作はスリップの原因となりますから、しないようにします。

■進路変更はしない

水滴によってサイドミラーが見えにくいため、後方の二輪車などを見落としやすくなりますから、前方が工事中などのやむを得ない場合以外は、進路変更はしないようにします。



III 気象状況に潜む 危険を読む

2.降雪時・積雪時

1 降雪時・積雪時の危険性

■視界が悪い

降雪時は視界が悪くなります。特に、大雪や吹雪の場合は、雨の日よりもはるかに視界が悪くなり、前方がほとんど見えない状況になります。

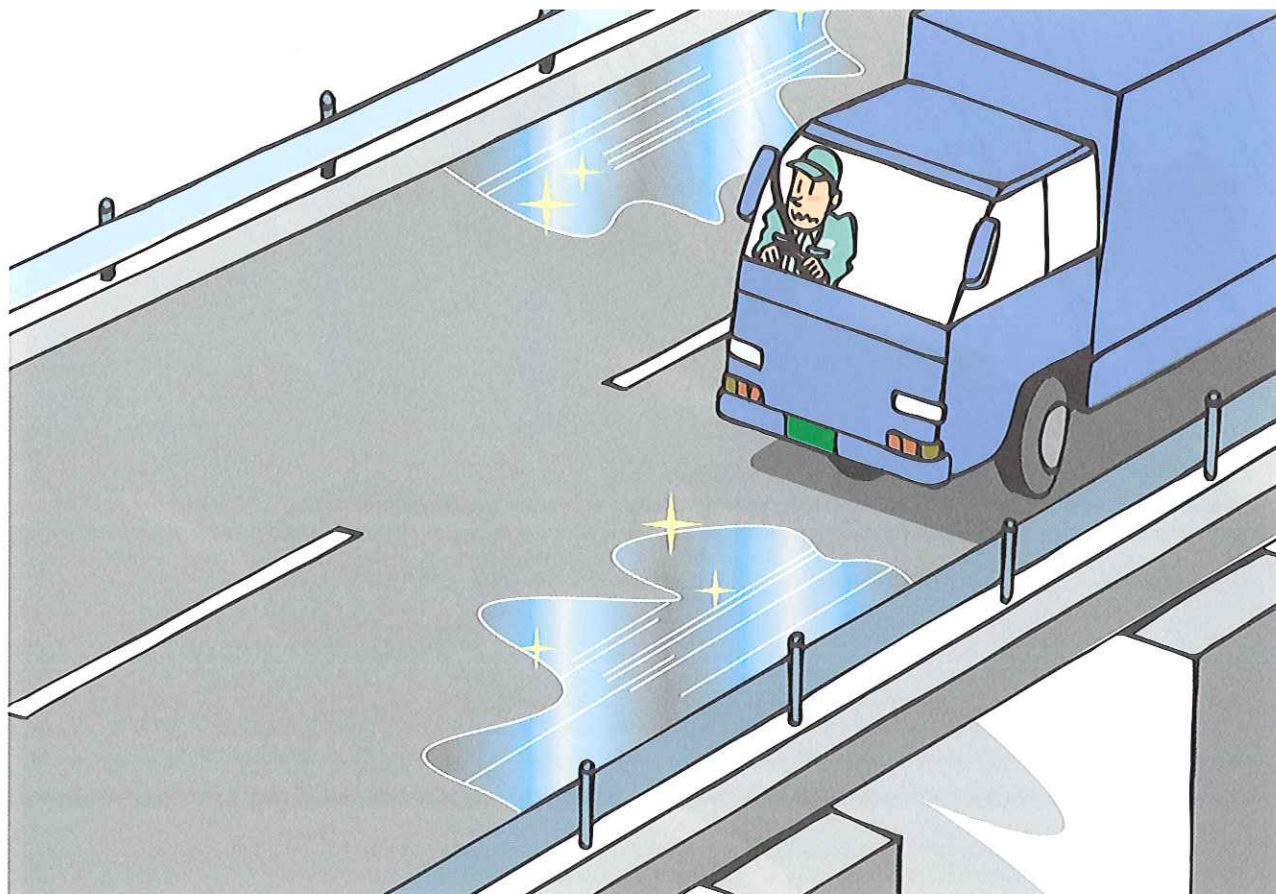
■非常にスリップしやすい

路面が非常に滑りやすいため、ちょっとしたハンドルやブレーキ操作でスリップしたり、ブレーキを踏んでもなかなか車はとまらず、前車に追突するという事故が多発します。

■路面が凍結する

特に、次の場所は凍結しやすいので注意が必要です。

- ・橋の上
- ・トンネルの出入口
- ・交差点付近
- ・切りとおし
- ・日陰になっているところ



2 事故防止のポイント

■スピードを落とし車間距離を十分とる

降雪時・積雪時は、スリップした前車に追突するケースも多いので、特に、車間距離はいつもの2倍以上とる必要があります。

また、交差点付近は車の通行量が多く、路面が圧雪状態となり滑りやすくなっていることがありますから注意が必要です。

■視界が悪いときは一時退避する

吹雪などで視界が極端に悪いときには、安全な場所に一時退避して、様子を見るようにします。無理をして走行を続けると、多重事故に巻き込まれる危険性が大きくなります。

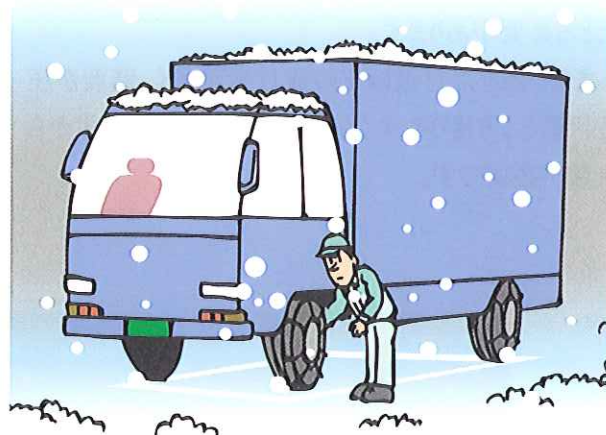


III 気象状況に潜む 危険を読む

■チェーンは早めに装着する

積雪路面になったときや、道路情報板等で「チェーン装着」の指示が出たときは、早めにチェーン装着場で、チェーンを装着します。「まだ、大丈夫だろう」と考えてチェーンの装着が遅れ、スリップ事故を起こしたというケースも多いので注意しましょう。

＊高速道路の路肩でチェーンの装着を行うのは大変危険ですから、サービスエリアやパーキングエリア等で装着してください。



■スタッドレスタイヤを過信しない

スタッドレスタイヤは、夏用タイヤにくらべると、雪道や凍結道での走行性能は優れていますが、決して万能のタイヤではありません。スタッドレスタイヤをつけていても、雪道・凍結路では乾いた路面に比べると停止距離がかなり長くなります。また、急ハンドルや急ブレーキはスリップの原因となりますから、スピードを落とす、車間距離をとるなどの基本を守った運転をする必要があります。



3.濃霧時

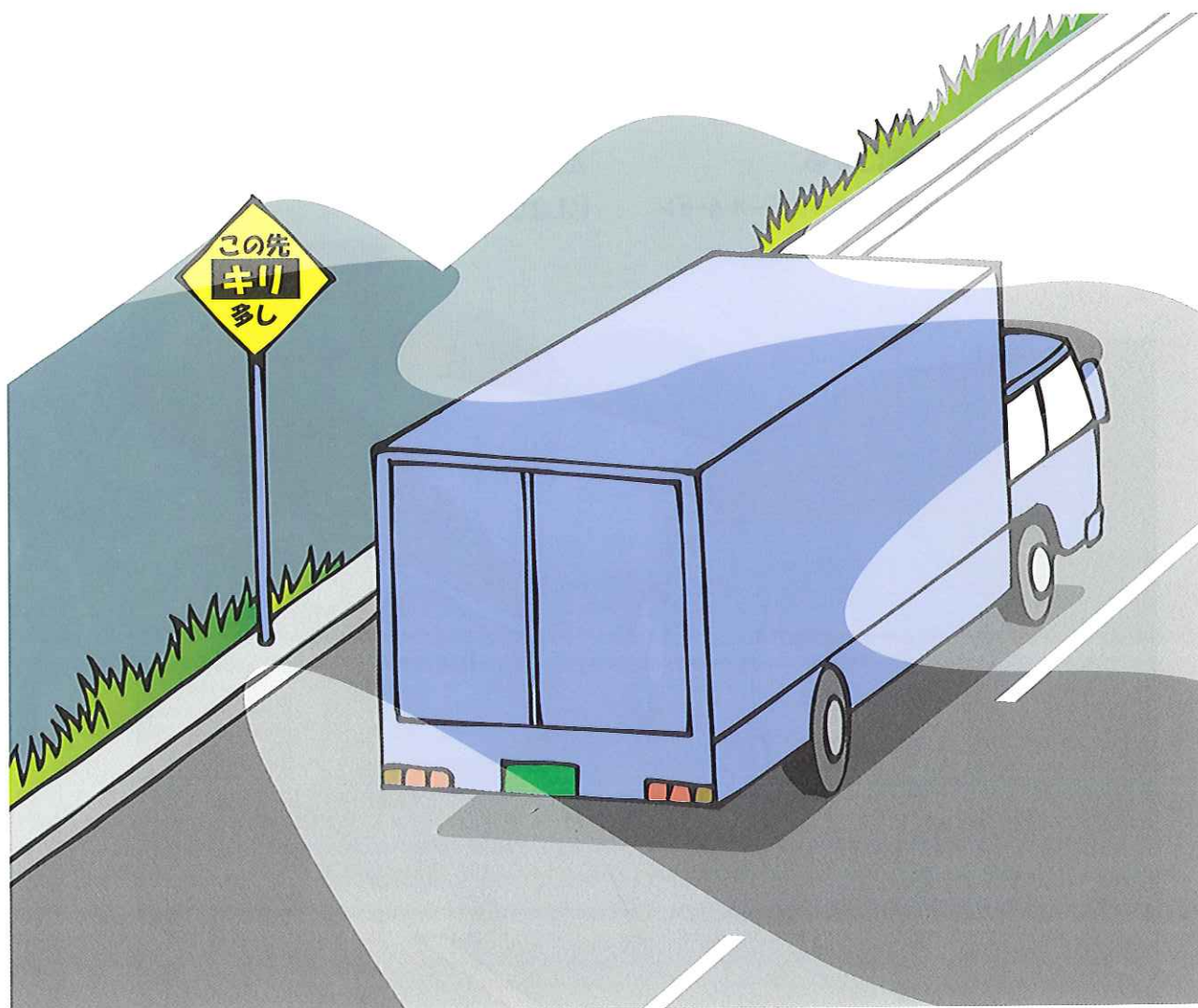
1 濃霧時の危険性

■前方が見えなくなる

濃霧時は前方の視界がほとんどきかなくなるため、前車の減速や停止に気づくのが遅れて追突したり、車線をはみ出して対向車と衝突するなどの事故が起

こりやすくなります。

また、前方の道路形状もつかみにくくなり、特にカーブなどでは中央分離帯やガードレール、側壁等に衝突する危険があります。



III 気象状況に潜む 危険を読む

2 事故防止のポイント

■ヘッドライトやフォグランプをつける

霧が出てきたら、まず徐々に減速していきます。急に減速すると後続車に追突されるおそれがありますから注意してください。また、ヘッドライト（下向き）やフォグランプ（霧灯）を早めに点灯します。これは自分の視界を確保するというだけでなく、対向車に自車の存在を知らせるという意味で大変重要なことです。

*ヘッドライトを上向きにすると、光が乱反射して一層視界が悪くなりますから、必ず下向きにします。

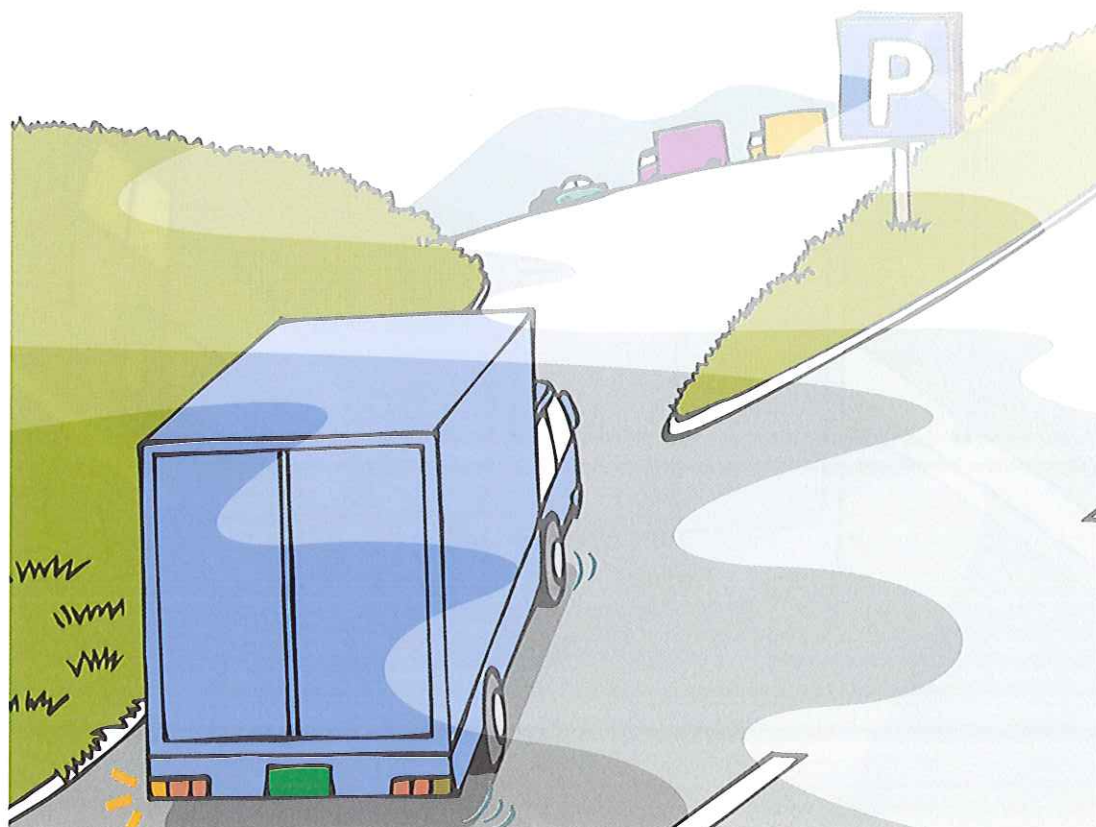
■ガードレールなどを目安にする

前方がほとんど見えないときは、ガードレールやセン

ターライン、前車の尾灯を目安に走行するとともに、危険を防止するために必要な場合は、クラクションを鳴らして周囲の車に自車の存在を知らせます。また、窓をあけ、音を聞いて他車の動きなどを確かめるようにすることも大切です。

■安全な場所に車を止め様子を見る

霧の発生は大半が一時的なもので、しばらく様子を見ていれば晴れてくるケースが多いものです。したがって、霧が濃くなっていくような場合には、無理をせず安全な場所に一時待避して、霧が晴れるのを待つようにしましょう。



4. 強風時

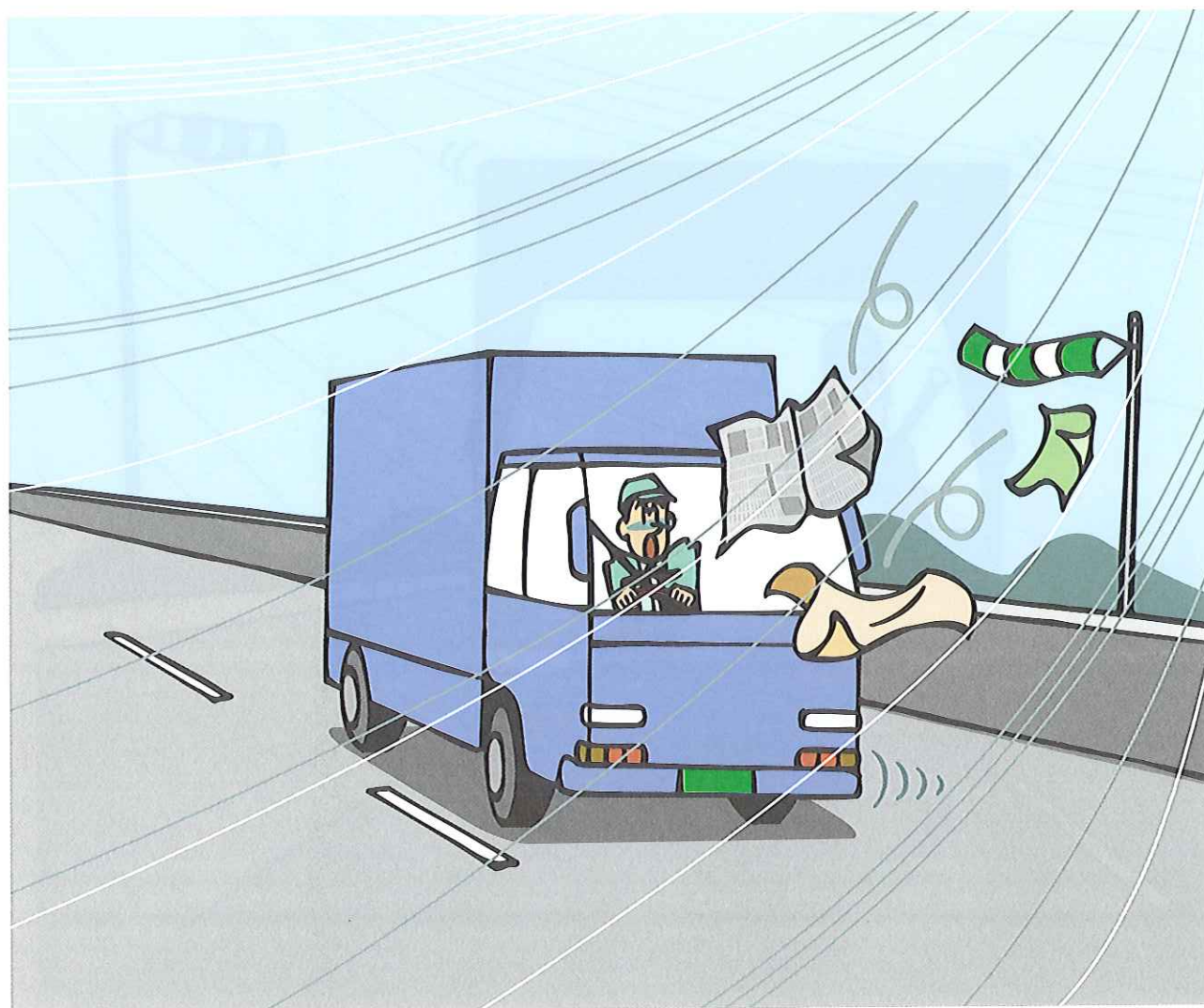
1 強風時の危険性

■ハンドルをとられる

強風時は、車が流され、ハンドルをとられやすくなります。しかし、強風で車が流されて事故になるというケースは少なく、むしろ、強風にハンドルをとられたために、あわててハンドルを切り返したり、急ブレーキを踏むために、事故になるケースが大半です。

■飛来物が視界を遮ることがある

強風下では、路上の紙屑その他が舞い上がり、一瞬ドライバーの視界を遮ることがあります。また、紙屑がフロントガラスにはりついて視界を遮ることもあります。



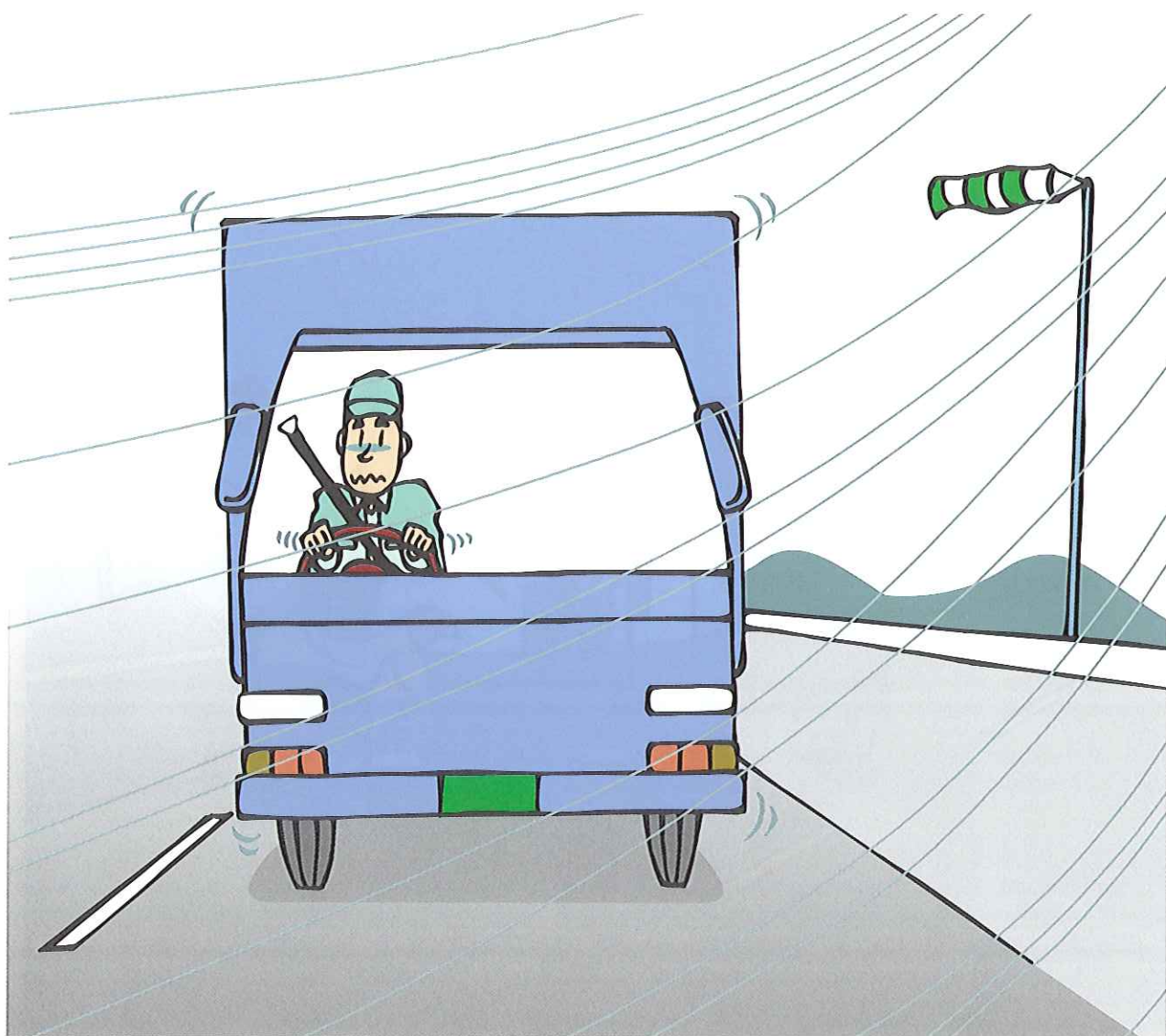
2 事故防止のポイント

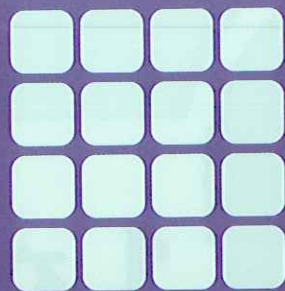
■ハンドルをしっかり握る

強風時は、ハンドルをとられやすいので、スピードを落とすとともにハンドルをしっかり握って走行します。特に、橋の上、トンネルの出口、切り通しなどは強風が吹きやすいところですから、ハンドルをしっかり握りましょう。

■強風にハンドルをとられたとき

強風にハンドルをとられたときは、あわててハンドルを切ったりせずに、まずアクセルから足を離してスピードを落としてから、小刻みにハンドルを操作して態勢を立て直すようにします。





危険予測運転

IV

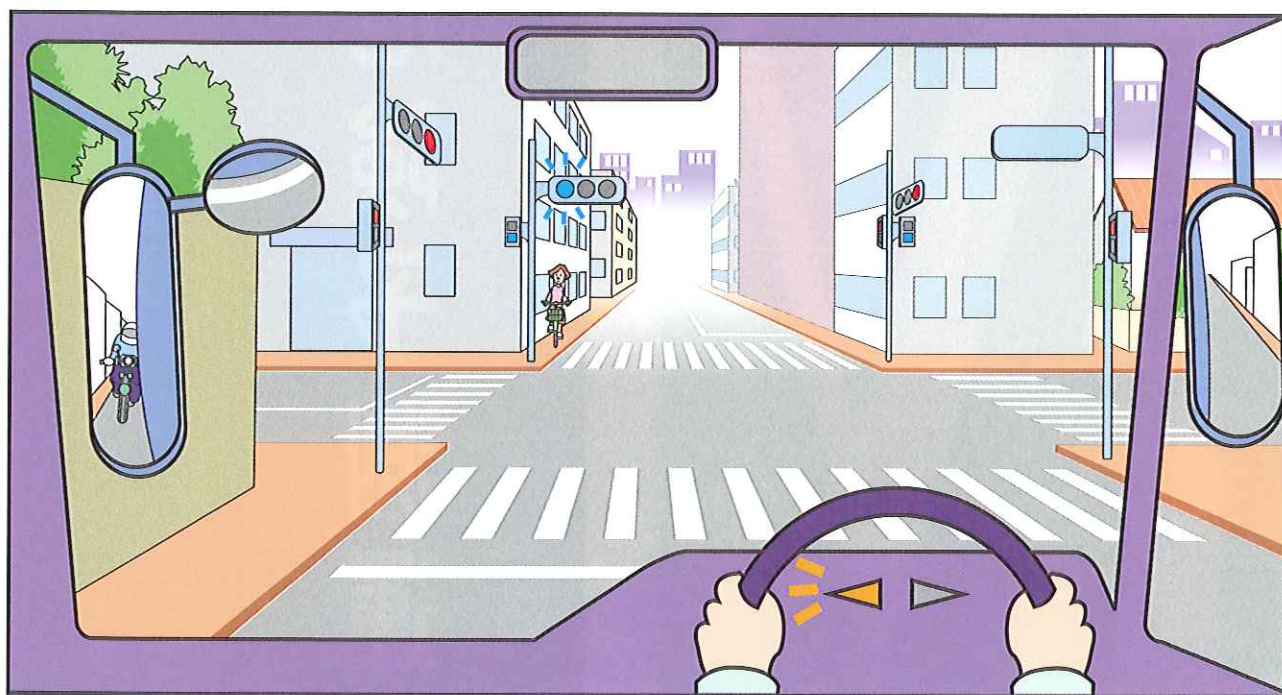
危険予測運転の重要性

IV 危険予測運転

1. 交差点左折

下のイラストを見てください。これはトラックの運転席から見た交通場面を描いたものです。このトラックは、前方の交差点を左折しようとしています。この場面に

は、どんな危険があるでしょうか。また、危険を避けて安全な運転をするにはどうすればよいでしょうか。



どんな危険があるか	どんな運転をするか

解説

■危険要因

①左折するときに二輪車を巻き込む。

後方左側から二輪車が接近しています。トラックは車体が長く内輪差も大きいため、このまま左折していくと二輪車を巻き込む危険があります。

②自転車と衝突する。

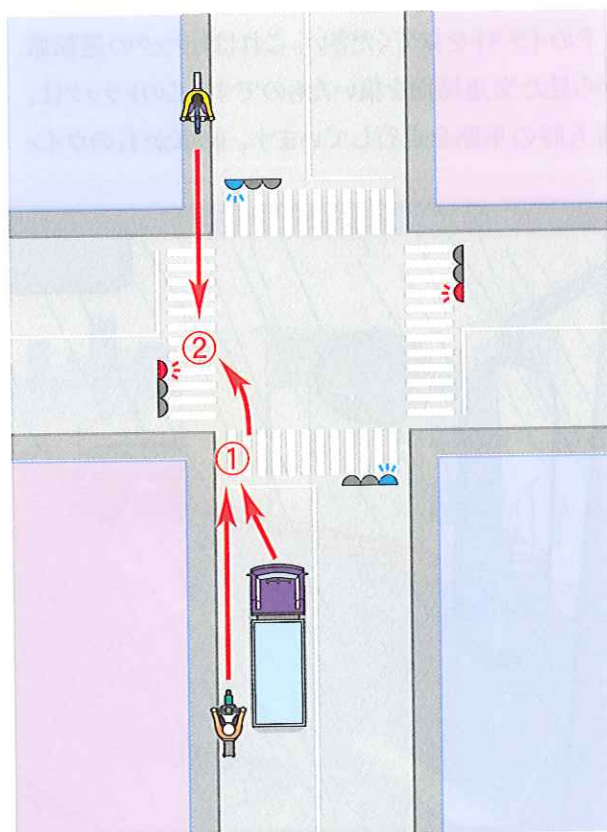
前方から自転車が接近しています。この自転車への注意を怠ると、左折時に横断歩道上で衝突する危険があります。

■危険を避ける安全運転のポイント

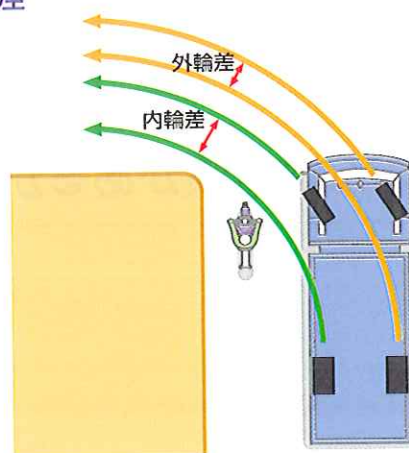
①左折時は、早めに合図を出して後続車に左折の意図を伝えるとともに、左側方や左後方の状況を確認し、二輪車等が接近しているときは、先に行かせる。

②トラックは内輪差が大きいので、左折していくとき左側方に歩行者や自転車がないかどうかにもよく注意する。

③横断歩道付近にも注意し、横断しそうな歩行者や自転車がいるときは、横断歩道の手前で必ず一時停止して横断するのを待つ。



■内輪差



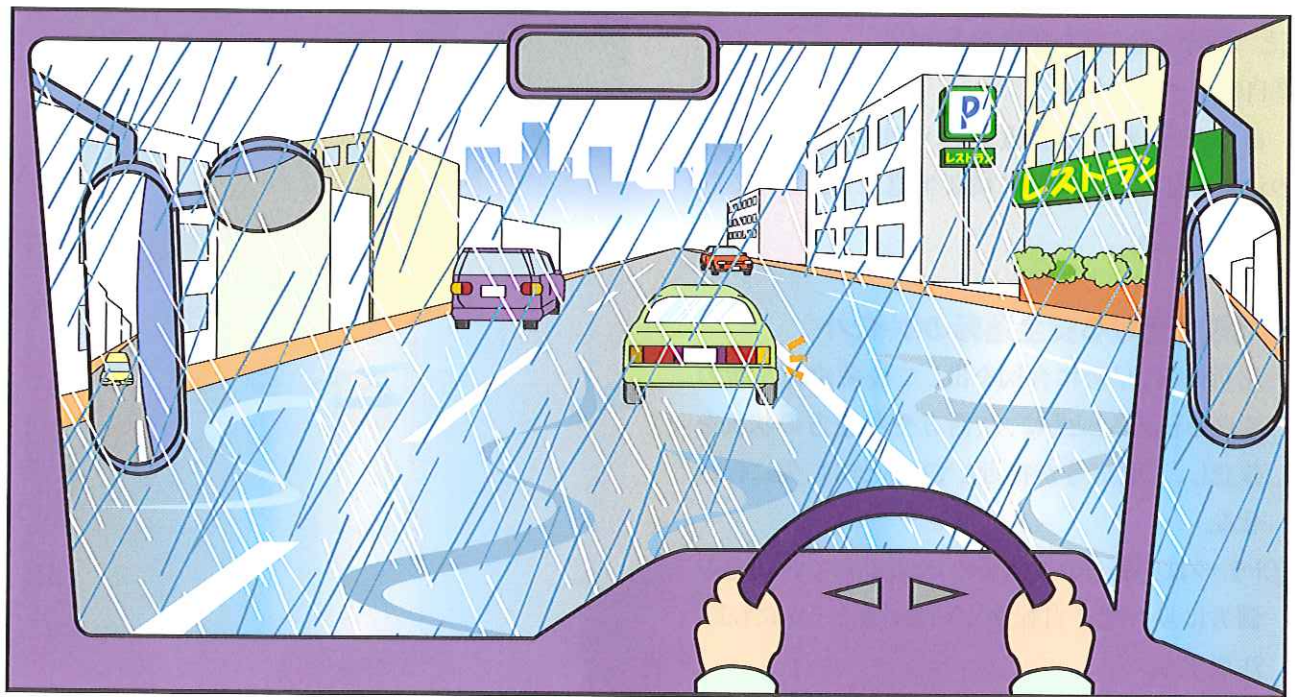
IV

危険予測運転

2. 単路走行

下のイラストを見てください。これはトラックの運転席から見た交通場面を描いたものです。このトラックは、雨天時の単路を走行しています。前車が右のウイン

カーを出したところです。この場面には、どんな危険があるでしょうか。また、危険を避けて安全な運転をするにはどうすればよいでしょうか。



どんな危険があるか	どんな運転をするか

解説

■危険要因

①前車に追突する。

右のウインカーを出した前車は右折すると考えられますが、対向車が接近しているため減速や停止をすることが予測されます。したがって、このまま進行すると前車に追突する危険があります。

②前車との追突を避けようと進路変更すると後続車と衝突する。

前車の減速や停止に気づいて、左側車線の状況を確認せずに進路変更すると、後続車に衝突する危険があります。

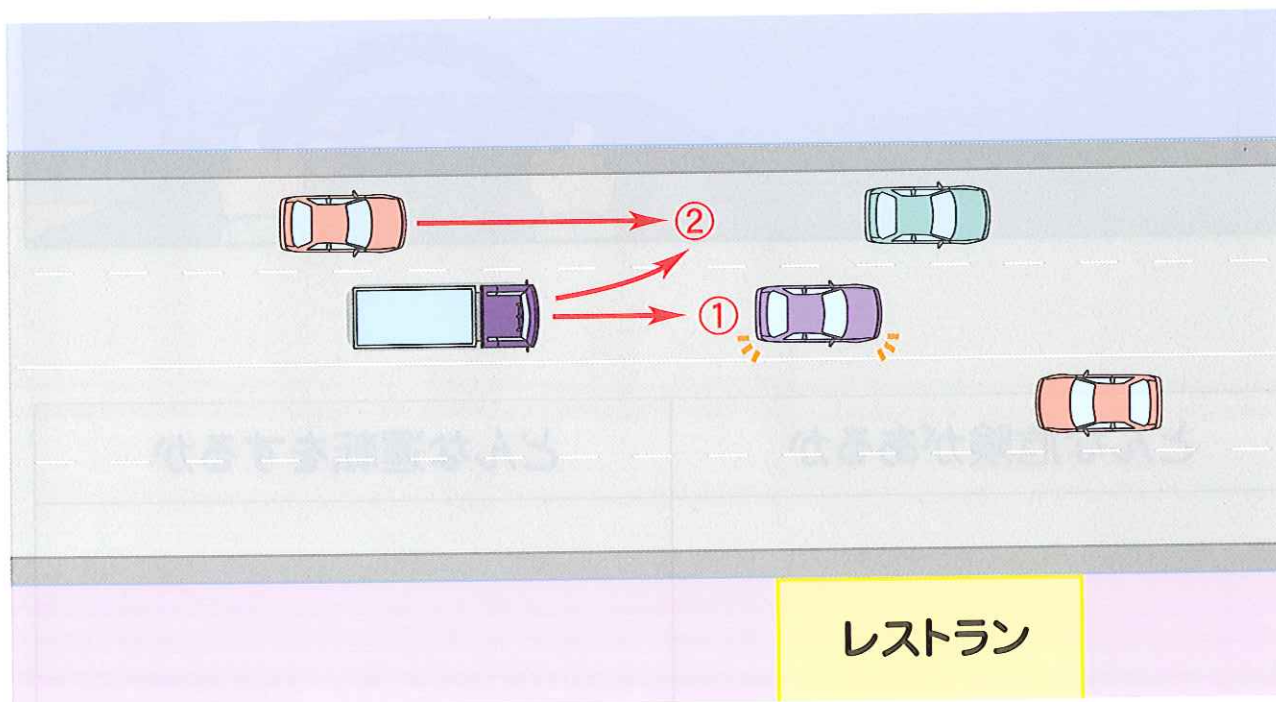
また、雨で路面が濡れているため、急ハンドルを切ると、スリップする危険があります。

■危険を避ける安全運転のポイント

①単路でも、道路脇のレストランやガソリンスタンド、あるいは脇道に入ろうとして減速や停止をする車も多いので、不用意なわき見などをせずに前車の動きによく注意して走行する。

②前車の急な減速や停止にも対応できるよう十分な車間距離を保持しておく。

③前車の減速や停止により、やむを得ず進路変更するときは、後続車の有無を確認し、後続車が接近しているときは一時停止して通過を待つ。

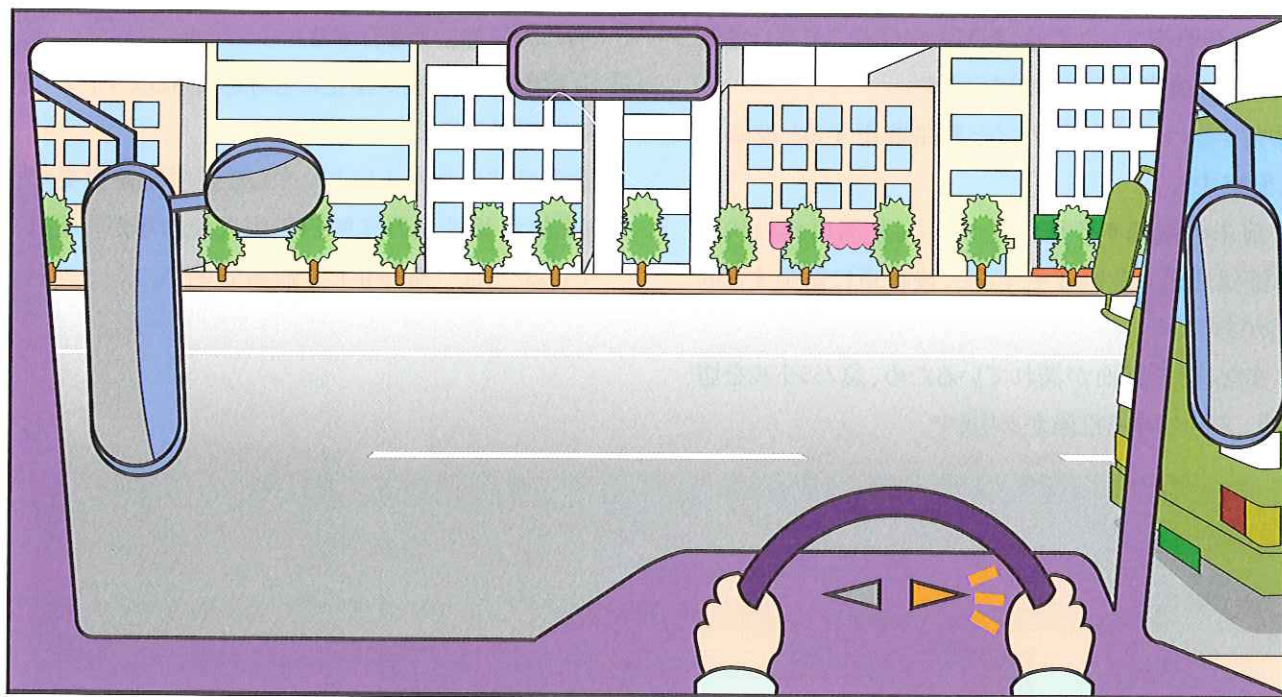


IV 危険予測運転

3.構内から車道への右折

下のイラストを見てください。これはトラックの運転席から見た交通場面を描いたものです。このトラックは、構内に入ろうとしているトラックが進路を譲ってくれた

ので、右折して構内から車道に出ようとしています。この場面には、どんな危険があるでしょうか。また、危険を避けて安全な運転をするにはどうすればよいでしょうか。



どんな危険があるか	どんな運転をするか

解説

■危険要因

①歩道を進行してくる歩行者や自転車と衝突する。

車道の状況にだけ注意して歩道の状況を確認せずに出ていくと、歩道を進行してくる歩行者や自転車を見落としてはねる危険があります。

②進路を譲ってくれたトラックの脇から車が進行してきて衝突する。

進路を譲ってくれたトラックの脇の状況を確認しないで一気に右折しようとする、トラックの脇から出てきた車と衝突する危険があります。

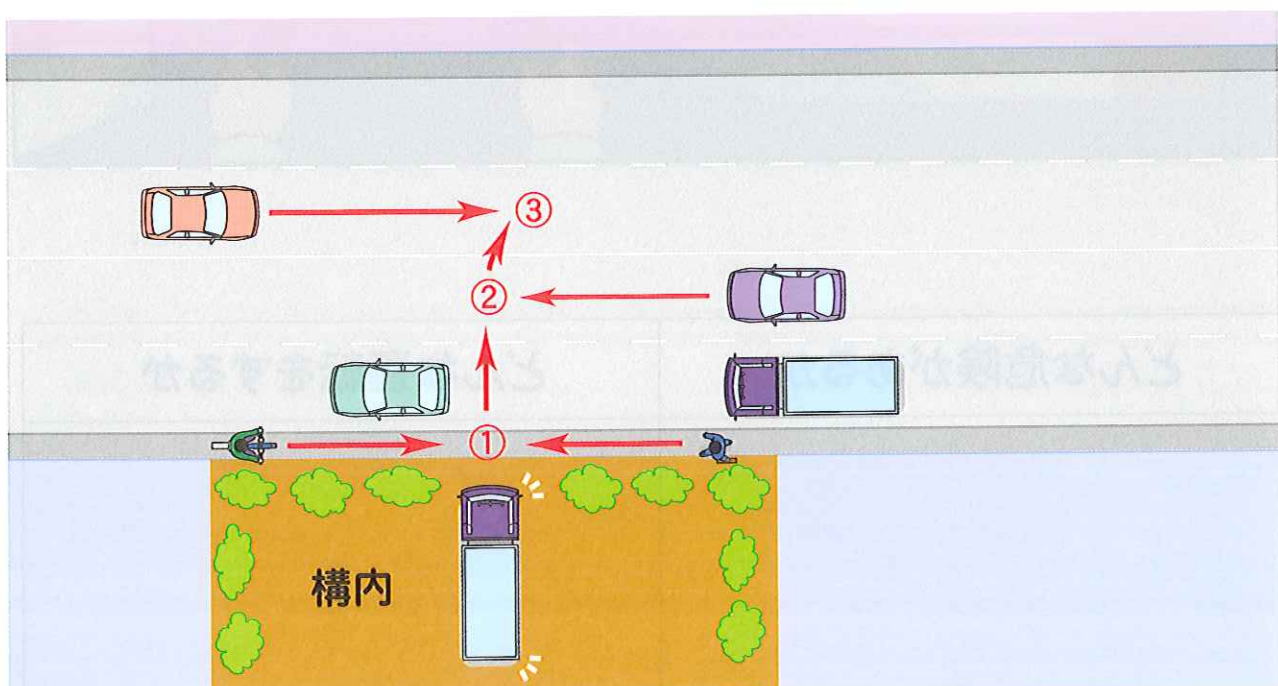
③左側から進行してくる車と衝突する。

右折していく道路の左側から車が進行してくる可能性もありますから、左側の確認を怠ると衝突する危険があります。

■危険を避ける安全運転のポイント

①歩道の手前で必ず一時停止して、歩道の左右の安全確認をする。

②進路を譲ってくれたトラックの前に出るときにも一時停止して、トラックの脇から車が接近していないか、右折していく車線の左側から車が接近していないかどうかを必ず確認する。

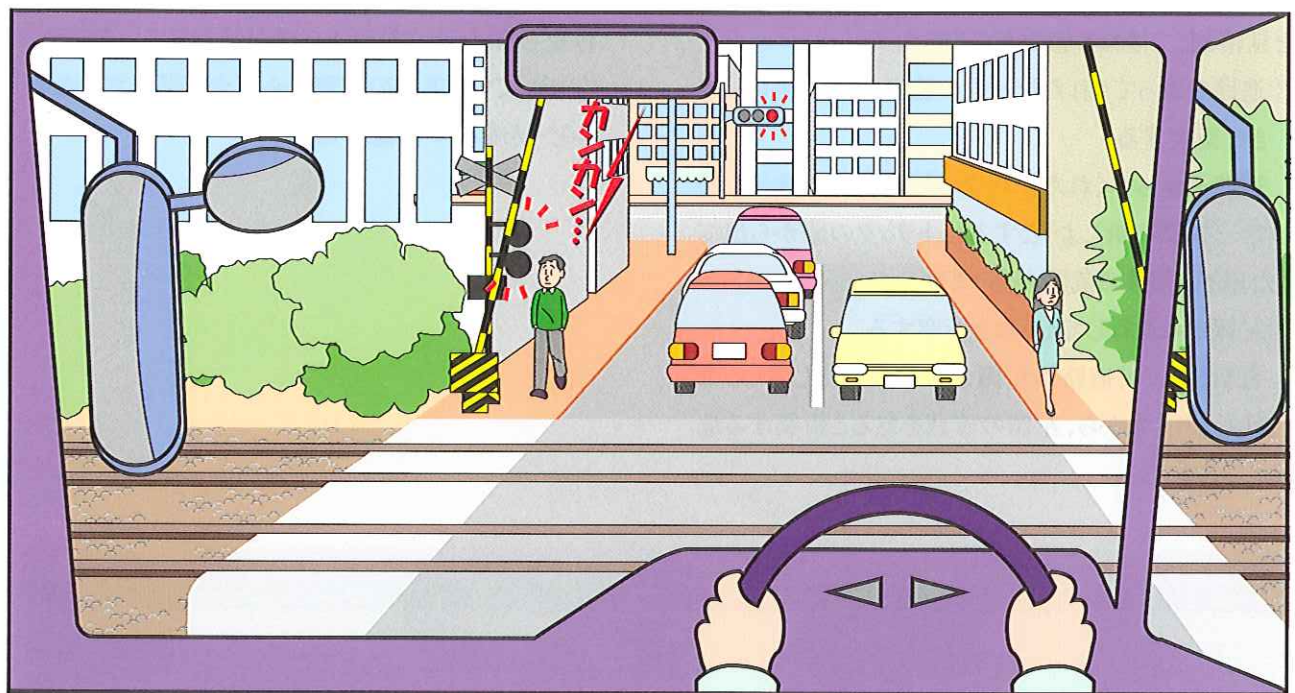


IV 危険予測運転

4.踏切走行

下のイラストを見てください。これはトラックの運転席から見た交通場面を描いたものです。このトラックは、踏切にさしかかりました。警報機が鳴り始めたところ

です。この場面には、どんな危険があるでしょうか。また、危険を避けて安全な運転をするにはどうすればよいでしょうか。



どんな危険があるか	どんな運転をするか

解説

■危険要因

①踏切内に車体の一部が残って列車と衝突する。

踏切の前方では信号待ちの車が停止しています。そのため車体の長いトラックが踏切に進入すると、車体の一部が踏切内に残ってしまい、列車と衝突する危険があります。

②踏切を渡ろうとする対向車や歩行者と接触する。

警報機が鳴り始めると、対向車や歩行者、自転車も周囲の状況にあまり注意せず、急いで踏切を渡ろうとしますから、踏切内で接触する危険があります。

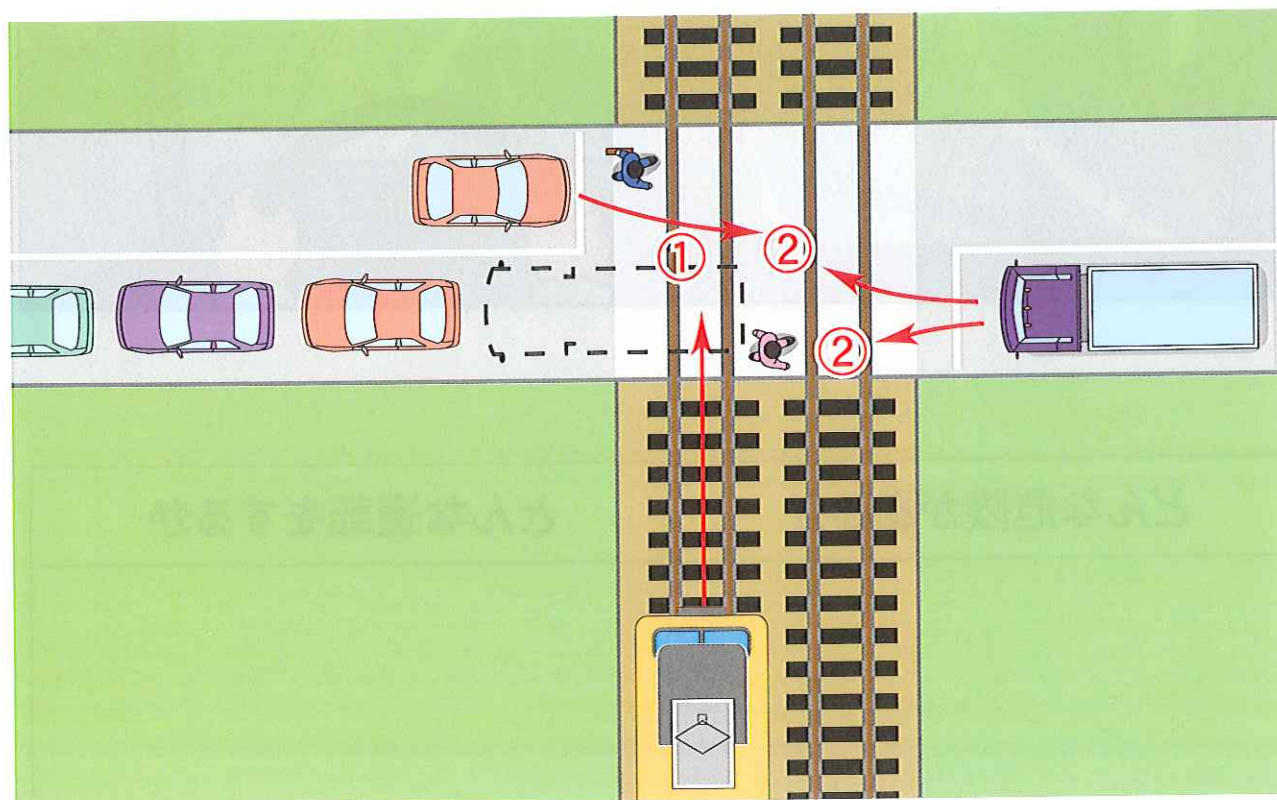
■危険を避ける安全運転のポイント

①踏切の手前で必ず一時停止して、左右の安全確認をする。

②踏切を渡ろうとする対向車や歩行者等の動きに注意する。

③踏切の向こうの状況にもよく注意し、信号待ちや渋滞等で踏切内で停止するおそれがないかどうかを必ず確認する。

④警報機が鳴り始めたら、踏切には進入しない。

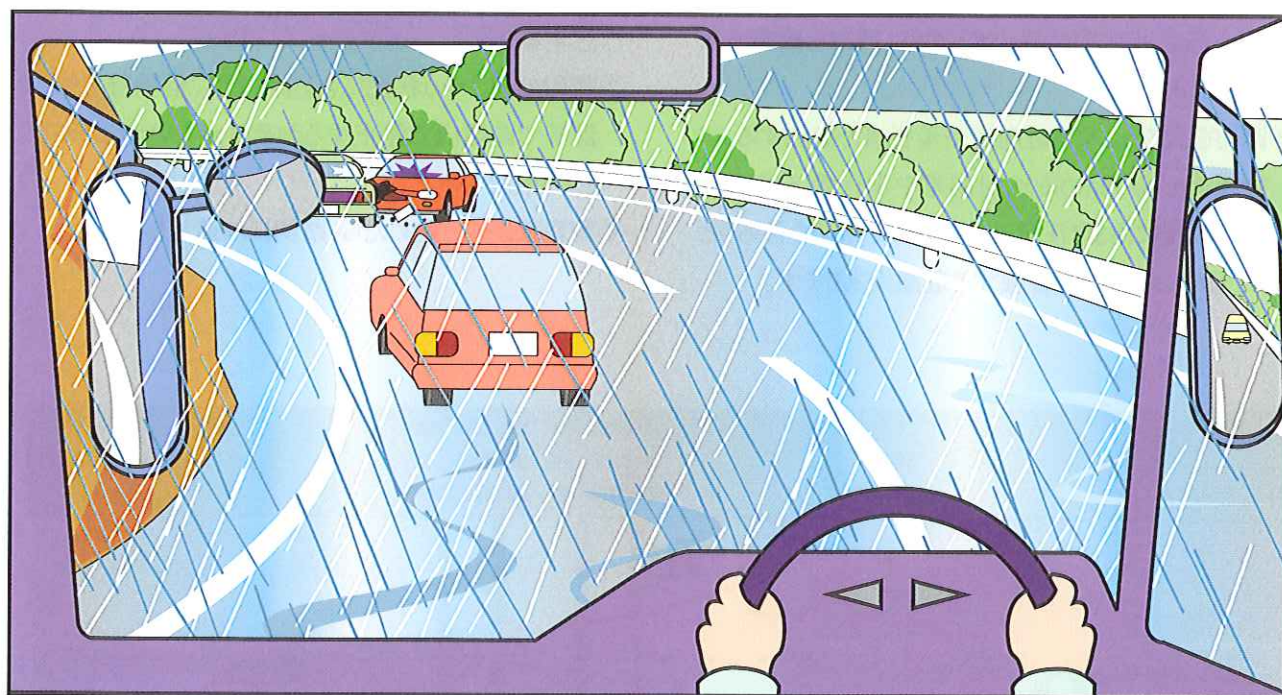


IV 危険予測運転

5.雨天時の高速道路走行

下のイラストを見てください。これはトラックの運転席から見た交通場面を描いたものです。このトラックは、雨天の高速道路を走行しています。前方で事故が

発生しています。この場面には、どんな危険があるでしょうか。また、危険を避けて安全な運転をするにはどうすればよいでしょうか。



どんな危険があるか	どんな運転をするか

解説

■危険要因

①前車に追突する。

前方の事故のために前車が急に減速や停止することが予測されますから、前車の動きに対する注意が欠けると追突する危険があります。

②急ブレーキや急ハンドルでスリップする。

雨のために路面が濡れています。そのため前車との追突を避けようとして急ブレーキをかけたり急ハンドルを切ると、スリップして中央分離帯やガードレール等に衝突したり横転する危険があります。

③進路変更をして後続車に衝突する。

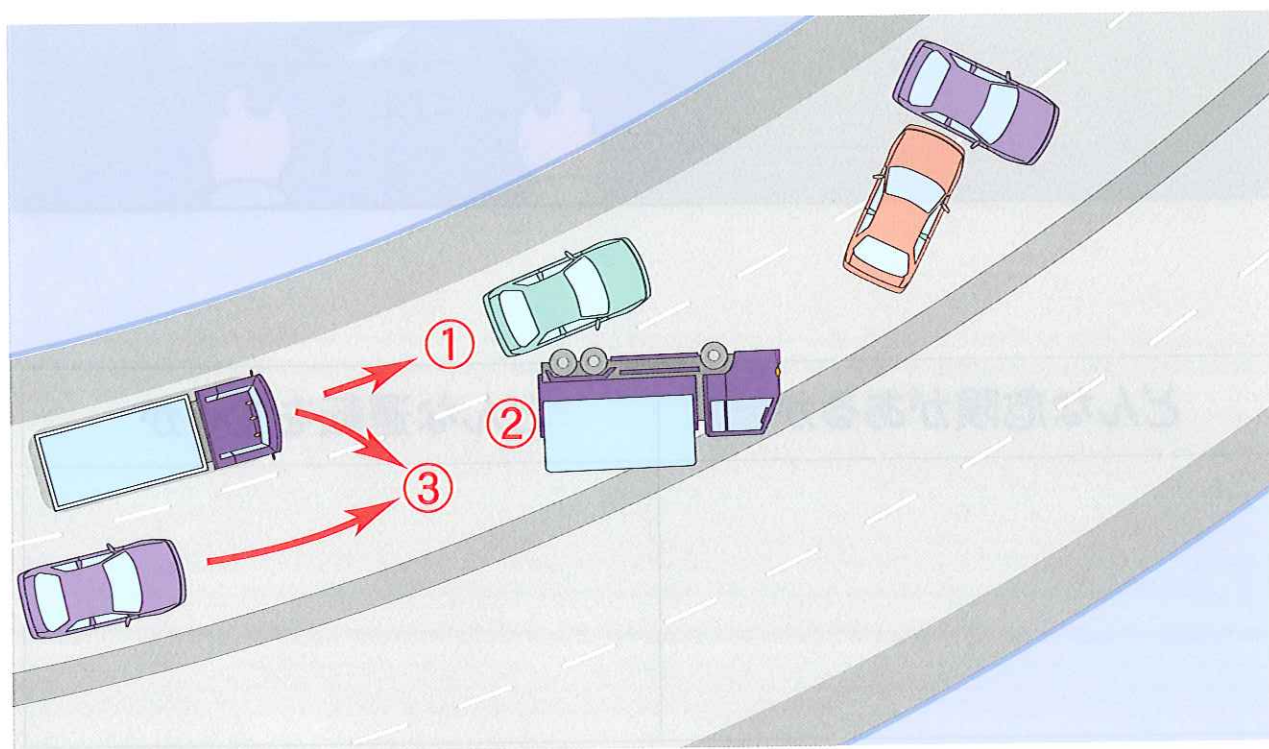
右側車線には後続車がありますから、進路変更しようとする後続車に衝突する危険があります。

■危険を避ける安全運転のポイント

①雨天時は視界が悪いうえに、路面が滑りスリップしやすいので、スピードを落とす（速度規制が出されたときは必ずそれを遵守する）とともに、前車との車間距離も長くとる。

②高速道路の路面が濡れたカーブでは、ブレーキやハンドル操作は特に慎重に行う。

③前方で事故が発生しているときに、強引に進行すると多重事故につながるので、進路変更をして先に行こうとはせず、徐々に減速しながら路肩に寄って停止する。

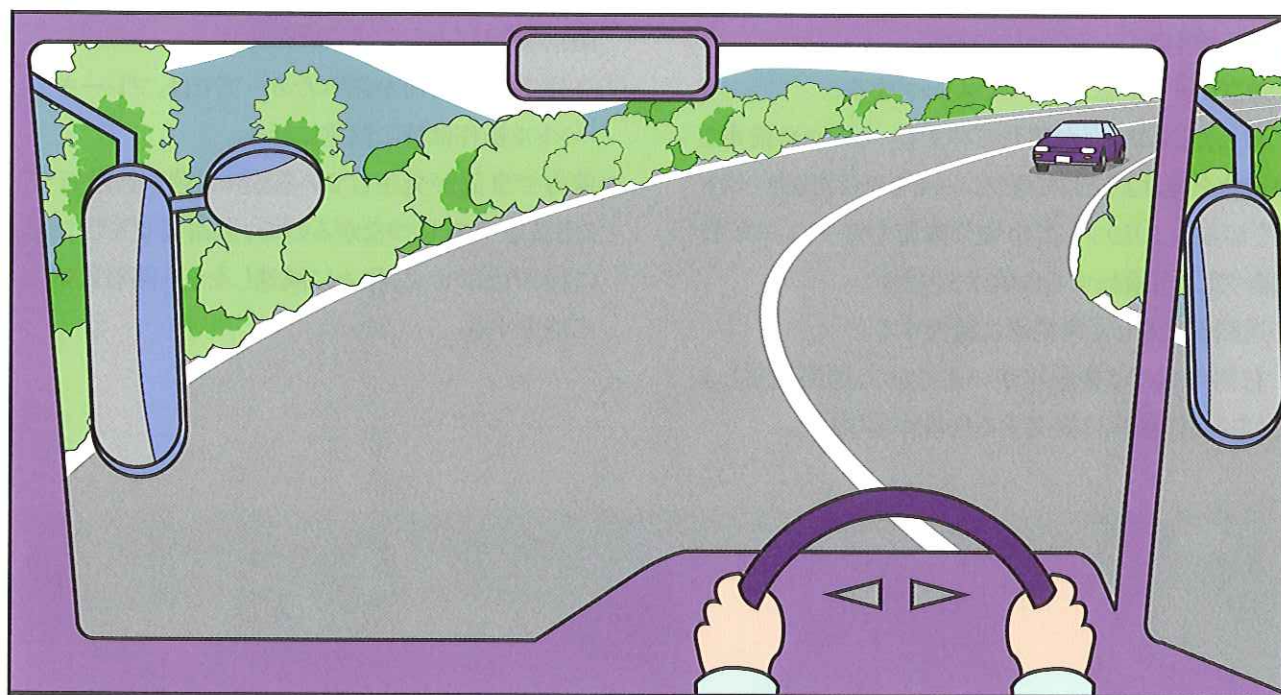


IV 危険予測運転

6.カーブ走行

下のイラストを見てください。これはセミトレーラの運転席から見た交通場面を描いたものです。このトラックは、右カーブにさしかかりました。この場面には、ど

んな危険があるでしょうか。また、危険を避けて安全な運転をするにはどうすればよいでしょうか。



どんな危険があるか	どんな運転をするか

解説

■危険要因

①センターラインをはみ出し対向車と衝突する。

片側1車線の右カーブでは、対向車線のほうが広く見えるためセンターラインをはみだしやすくなります。また、トレーラの場合、センターライン寄りを走行すると、車体の一部がセンターラインをはみ出してしまう危険があります。

②カーブの途中で横転したりジャックナイフ現象を起こす。

カーブの途中で急ブレーキをかけたり、急ハンドルを切ったりすると、走行安定性を失い横転したり、トレーラがトラクタを突き上げて「く」の字に折れ曲がってしまうジャックナイフ現象を起こす危険があります。

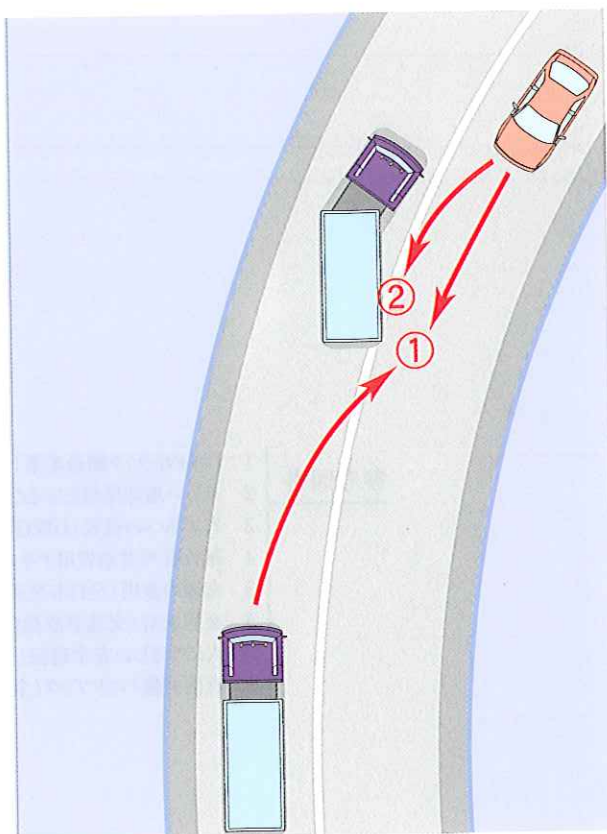
■危険を避ける安全運転のポイント

①カーブの手前で十分に減速し、カーブの途中ではブレーキ操作をしないようにする。

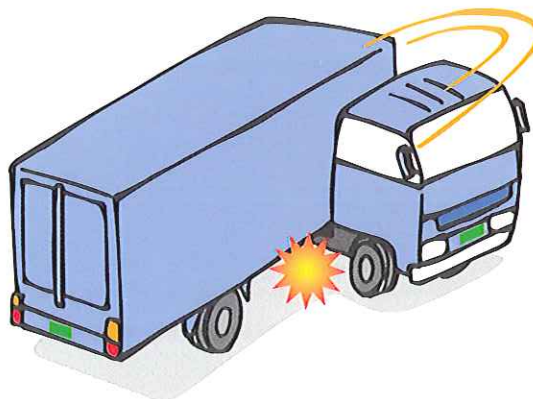
②カーブの途中での急激なシフトダウンもジャックナイフ現象の原因となるので、カーブの途中ではシフトダウンしない。

③ハンドルとブレーキの同時操作をすると、横転やジャックナイフ現象の大きな原因となるので絶対にしない。

④車線を守って走行するとともに、車体の一部が対向車線にはみ出すのを防止するために、センターラインに寄り過ぎないようにする。



■ジャックナイフ現象



参考図書

- 1 日本のトラック輸送産業(全日本トラック協会)
- 2 美しい地球環境を守るために トラック輸送と環境(全日本トラック協会)
- 3 省エネへの挑戦(日野自動車・全日本トラック協会)
- 4 運行管理者講習用テキスト(自動車事故対策機構)
- 5 交通の教則(全日本交通安全協会)
- 6 交通統計(交通事故総合分析センター)
- 7 人にやさしい安全運転(全日本トラック協会)
- 8 点検整備ハンドブック(全日本トラック協会)

事業用トラックドライバー研修テキスト 4

危険を予測した運転



社団法人 全日本トラック協会

〒163-1519 東京都新宿区西新宿1丁目6番1号新宿エルタワー19階
TEL.03(5323)7109(代)

ホームページ <http://www.jta.or.jp>